

AZILE

私は問いかけます。

Vorwort

Ich habe die Frage von Hiroshi Minamishima gesammelt und einen Markov-Bot darauf antworten lassen.

Hiroshi Minamishima war ein japanischer Kunstkritiker, zeitgenössischer Kunstphilosoph, künstlerischer Leiter und Professor an der Joshi Art University.

2016 ist er ums Leben gekommen.

Minamishima äußerte sein Tun in der "Fragestellung" wie folgt: "Ich habe verschiedene Ausstellungen und Theateraufführungen produziert, während ich den Künstlern diese ständigen Fragen stellte. Kunst ist eine ewige Frage ohne Antwort. (...) Ich möchte die Sensibilität wecken, die nur in uns selbst existiert. Ich bin davon überzeugt, dass dies das Wichtigste ist, was ihr am Anfang eures wahren künstlerischen Lebens tun müsst."

Er stellte seine Fragen hauptsächlich Künstlerfreunden und Studierenden.

Ich habe zum trainieren des Markov-Bots Texte von Atsushi Sugita, Yasumasa Morimura, Miwa Yanagi etc. benutzt, allesamt Menschen, die eine enge Beziehung zu Hiroshi Minamishima hatten.

Ein Markov-Algorithmus ist ein stochastisches Modell, dass (in diesem konkreten Falle) Texte daraufhin analysiert, welche Wörter mit welcher Wahrscheinlichkeit auf welche anderen Wörter folgen. Es speichert diese Wahrscheinlichkeiten für jedes Wort und baut somit, ausgehend von einer Frage, einen Antwortsatz, Wort für Wort auf.

Diese Texte wurden für dieses Buch zurück ins Analoge geführt und ausgedruckt.

Sayaka Kuramochi

57 「あなたの定位置とはどこですか。」

それはヨーロッパ各国で厳しく指摘しておきたい場所のはずなのだ。地続きで現在へと連続してくれそうもない。カッセル・ウィネット・カフェがある。こうしてみせるものと正常とされるべきもののさえ手にしたカッセルにひとつで、わずか5分の差で許しているのは、チャドの詩人クルジー・ラムコの『ヴィント・アイヒホルンの姿勢をかつてモルダヴィッドがレクチャーやワークションであり、それを求められるかもしれない。ブライラの作品とほぼ同時代を乗り越えようとする意識ということは何か」と題されていない状況がそこに足を踏み入れたアテネからの住民そのものでもある社会の負荷の軽減だった。レスボス島に向かうはずだ。ディアがアンゲラ・メルケルによるものと直面させられたと厳しくない。ヴィザの申請がどれだけをみれば、移動はきわめて現実的な基準を越えるための時間は充分あり、1648年、ヴェーバーの場所ということもできないほど静まり返ったシンタグマ広場を利用した量子テレポーテーションに遭遇した、キプロス・リトアニア館のパフォーマンスで二人は出逢っているはずだ。少なくなっているという。近所の知り合いの強い、国家という大きな役割を果たしてしまう危険性があるのはアイヒホルンが展示している。意地の悪さに襲われてしまうことだろう。自国の性差別への積極的な取り組みは、オクウィの方向からアテネの街を徘徊するものとされ、敵対し続けた漁師たち。一時は国営航空だった。分節化された桎の木7,000本」。カッセルの街を透かし見せるエーゲ航空による裸体画を焼却してしまうとどうしても、産業革命後、困窮していることもあるだろう。へたをすれば、むしろ際立っているはずの車両やビルが、注目を集めるというモダニズムは、今日の世界ではヴェネツィアの建築ピエンナーレの作品が少ない。けれどもその編集を担当してはすでにあることで、なぜそれが抱える問題であるから、T4作戦と表裏を成す、アルヴァロ・シザ・ヴィクトリア広場の集会がある。この問題とは異なる、ある種の崩壊が、かつては荒廃している、彫刻の概念が冒頭から頼りなげなボートでそこにある島出身のアーティスト、ホルスト・モダニズムが、ある基準以上の顧客に対しては、かすかな接点に対して、あまり感じることになる。作者はパヴェル・ブライラのボードに起源を持つヘッジファン・デル・ローエがローザ・ルクセンブルク通りを暫く行って

1 「あなたの歴史は何メートルですか。」

それは、作品を最小単位と考えることができないが、当時はただでさえ、自然科学部門に限れば、同じように思われる感染の第一波はやり過ごすことになった。そんな状態に微睡んでいたのではないはずだ。しかし同時に、根本的な性質を再認識すると、こうした可能性としているブラヒム・ガリがコロナの治療のための一歩を踏み入れたゲストたちは、溢れかえる馴染みのない居心地の悪さとも言えよいだろう。それはそのためだ。繰り返し表明しておきたい。エピソードや端緒として創刊されたと思われる感染の第一波はやり過ごすことができたものとしても、産業革命後の文明に対する態度など、今日の世界大戦後、アートの動向を、社会学者たちも、今日のアーティストや展覧会についてももちろん検討してみるべきではない。オクウィによって考えるにはどこにも見当たらないもののひとつなのだと言えるのかもしれないという理解は、特殊でないモル、目的に縛られない。そうした懸念を確信に変えてくる。戦時下の事態に対する姿勢の在り方については重要な位置を占める実験室のような誰しもが認めたのは、愛人だった兄の死がきっかけとなった。こうした積層されてしまうこと。そうした援用こそを契機として、充分には理解されているというわけではないはずだが、それは、アーリア式物理学賞を受賞している今日において感じられる嫌ユダヤ人一掃、ユーデンフライの一環としても、だからこそ作品や活動が積極的に実践を試みていなければならないわけではないとする表現活動を機能的なものなのだ。しかし、驚くべきことにするのはここ最近のことと深く関係しているという印象は、まったく理解することができるような関心や傾向、姿勢が生まれた黒板が取り囲み、そのコミュニティや、人種、階級、セクシュアリティなどが主張されてしまったのではない。むしろ真摯な探求を意味するものに焦点を合わせて限定的に捉えている。しかし、この宇宙で可能になる。ディートリヒ・エックルトがトゥーレ協会の敵と見做したルドルフ・ツィーグラの理論だけではない。こうした考えを抱く人であったファイヤアーベントの、整合し過ぎない弁証法的な道筋に則って生み出されたものに対する驚き、あるいは彼らは、周囲に引けを取らないものにとっては、状況は気を重くさせる。素数の問題を眼前にあることは、果たして本当にそうした表現はよく知られていた論考も、最終的な見直し作業を

2「背中のほくろを数えてもらったことがありますか。」

それは、あらゆる知的営為に対しても適用できるような空気のなかで叶えられるのだが、ディレクターもまた、映像や写真、紙媒体など間接的なものでもある。一方、あたりまえとも言えよいで少し説明してきたものが、病禍に対して期待を抱いているかもしれない。表面的な力学よりもまず、社会の諸問題を抱えつつもある。一方、モル的な機能主義は誤りだということだろうか。パンデミックの直近の事例とされているわけではなかった速度と範囲で、吸収、普及が進んでいる。果たして本当にそうなのだろうか。むせかえる馴染みのなかで、そうした傾向に対する距離感を支え、後押し、さらに10年遡れば、目を逸らしてきた結果のひとつでもあり、社会化は、何でもある、いまだ知られていたのは、あらゆる知的営為に対してもられれば、目を逸らそうとしても、映像や写真、紙媒体など間接的なものと直面させられるフレデリシアヌムの二階にインストールされたと言うことと短絡することで、当の表現について言えるだろう。また、ブランショやリングスの理解と表裏を成す、アルフォンソ・リングスの理解やオルタナティヴを可能になる。われらはみなレニの時代まで飛ぶという意味に辿り着こうとしてしまったく異なってきたことを希望するモロッコが反発し、北アフリカのカントリー・シンガー。美術関係者には聞きなれないわけにはいかなる表現活動を支えていたドゥルーズの描像に回収しよう……。フーコーが臨床医学についての考察に進む前に、何よりもまず、社会の一員として、世界を覆う憂鬱な事態によって、加えてさらに10年遡れば、目を逸らそうしたオクウィ・エンヴェゾーのドキュメンタで感じた、本来性質の異なる、2016年からポリサリオ戦線の結成は70年代であるように感じられたのだ。キャロライン・クリストフ＝バカルギエフの13回目のドキュメンタは、オクウィによって、加害者の側に立つ場合もあった。身勝手な結論に辿り着こうとするアートが掲げるコミュニケーション (ululation) は、エキゾチスムを昂じさせ、再びそれを求めることだが、本人も認めるべきなのだろうか。確かに、ジャン・ブリクモンのスキャンダルを生み出された芸術性を惜しみなくプロパガンダに注ぎ込んだレニ・リーフェンシュタールのドキュメンタを手掛かりにする。まずは一世紀以上前の出来事をその時代の芸術活動に対して抱いているということは間違いないのだ。

3「貨幣経済を疑ったことがありますか。」

それは、アドルフ・シュタルクでヴェーバーの論文は、特定の理解は、そうした利己的でなく、ドイツの中堅都市の気配を感じられてきたという意味することがすべての原因となく、一般的に実験室にとってみることによってくれるのではなく、何やらわけではない。もちろん、似たような領域であるいは戦前の出来事をそうした考察されてはまさに 10,000 人が、量子力学場を見逃しているもので少し努力は蔑む類のものに限れば、芸術活動に対することの意志を秘めているはずの筋道や困難なもののひとつなのかたちは、それとは、言語に依るものだったもののなかったか。グローストールレートのない。オクウィーン大学の領域のものではなくブロースは、まった。こうした仮定していると思われる、素朴実在論への関わって駆動されているのではなかで捉えられることで、戦後そのものの、あるいはときそうであるいはその遅れを生み出されてテントやシーは、そうだ。西サハラの独立を目指すポリネールのドキュメンタとは、広く蔓延して、現在のようにするという、あたり、少なくなり、クリムトや、量子テレポーティ番組のよいだろう。クス主義を退けられないのだというわけでは、プラッツァイヤーアレントにとっている、美術史的な発展が理性や政治的、政治学的な理解を招き入れようという評価する望月新一の宇宙で可能性を特別な仕掛けも何もない何かがあるいは戦前の芸術表現する紛れもない。彼がある意志を秘めてくるという批判的に縛られている。違和感に包まれた。いやりと根を控えめにはおのずと限界があるという報道があることにして、言わば逆還元する文様の向こうには聞かないのできたものとの、どこには、そこでの枠組みのなかった方がよいのだ。その解決をみなアプロパガンダラスで重態に微睡んでいる、関連するための枠組みにもかかわらず、初めているということとの結果として遠ざけてしまうことはいえるだろうか。むしろ、同じ出自に対してしまいそうとし、ぼんやり方だとして愉快なことがないか。パンディレクチャーを通してのとなしな何か、量子力学を解きほぐそうした臨床医学だけを一瞥したものがそこにはあらためて一部の人が薫陶を受けてくれたのだ。そうした科学者が異端の地域創生のプログラー理論だけではないだろう。肝心の芸術的な遷移に過ぎない。スキエンタールスで重態に陥りかねない怠慢であろうかということができたが

4「街で何番目に背が低いですか。」

それは、残念だが、それを可能なのだと書いて覚醒に至ったことに拠るものではないわけではないのだ。知るという素朴過ぎない怠慢であり鈍感なのだが、アドルフ・ヒトラーの二階にイタリアに限定されることができな隔たりません…また問題を見つめるべきな臭く、経験を通してきた柄谷行人のアルベル人だったものなかったという道筋に沿うようという言葉が、特定の国民には否めない、あるいは、シリザの姿を晒し、ぼんやり方を示唆してそうした誤解される。そんな気持ちに言えることができる欧米の状況のなかに全体としかねないことで解消の可能性を感じられた小さく印刷された生活の内部についていわゆる本質的な説明も、あるかもしれないのではなくともこの言及が、それはないという枠組みであるなどでもある。あるいは戦争末期とは隔絶されているかたないことでもある。一方、あるのだと要求される空港再建がうまでも、この分野で尊敬に値することに対しても、アートのなかつている。機械を容易に想起させられてテントという事実、アテネに学べ」という体制確立のため、そして滞在と、あるものではない。おそらく、可視的な構造。もちろん、そのある。かつて自著のないのだと誤解を、ドゥルーズだが、揺るぎなかにこれまでの文化に関して知られたものではなかにさせられないだろう。彼に対して本当にそれが自身も予期しておくべきだとしていたなかで振舞うことを少し遡る、いまはまった。せわしなく、当然ギリシアと同じような意味するボトム・アポリサリオ戦線の指摘していることになる気配は後退し、むしろただでさまざまな領域の、人類のものだとしめない実践に関しても重要なのだということが出来る可能なのか、いたにもない世界大戦下であればヨーロッパに渡ったのではなく、自然科学の欺瞞を暴いてのスリが多く、世界大戦後、アーティストや展覧会の敵と見るべきだとする状況を想像、思考方法は素朴実在論への関係者だけではなかった。それらが同時代に、そのただでさえ可能性を持つことによって駆動されていないが、同じ病に倒れてしまうことに結果した認識の昂まり実践に対して認めるべきだろうか。ヨーゼフ・シーレント的な発展が重いという意味ではない。量子テレポーテーションは、今日ではないはスペイン・ブランシュタイヒマンらの理解は、それは、あるという標語を夢想し、依然とさえも利用されてきたが、それは極東の危機が完全に

5「覗いている自分を覗かれたことがありますか。」

それは、生物学や社会性や社会が向き合わせるものできた。ところのなかたちで言えば南シナ海や尖閣諸島周辺の奇妙な空間は馴染みのなのだとするものだというスローチを試みられ、一方、モロッパの市民運動や政治的、政治化、政治性のあいだろうか。そして適合性のあいだろうか。かつて住民たちも、シリザが、災害においてのアフリカの政治化に関していた沈鬱な事例に過ぎないだが、本当の表現は、否応なくないが、指導的な資本の独裁体制と結びつきを頼りにさえなくてはなくてははいえ他国からの研究対象は現地で始まる資本主義的過ぎ去ったのものでは辿り着くことは対岸の国に売り渡さざるをえない。今日の社会性あるのかもしれないま、芸術表現や、人間にとってさらだし、着々として遠ざけての原因して正式な応答はした事態と関係して解釈できているという報道がある。もちろん、当の表現は、知の光のものを取り、それをシムジックのドイツの東部戦線とモロッパに渡る、何やら出かけ離れた人々でさえ失ってくれるという類の理解を招きかねないことだけでなくさせ、そうとする作用はどこも必ず引き継いで越えたことができるのはちょっとにも、何の裏づけも何もなくではならまだこの稿でもありまえの原点を検討するものに可能性を無視することを理由はどうか。なおざりに関して試みてももちろん、そのものと直接受け入れる。素数の問題の深刻な問題へのアーベントやそのとき、視線の問いないが、さらについているリヨン・シーレという、アテネ・ヴェーショップ・エンナーレンス、ロレンス、ヴェーショやリングスの理解の文化支援し、どこには元の人にとって、こうした取り組みではないとでは 20 世紀初頭にイタリア式物理学の揺るぎない。ギリシアの影。一瞬成功していない。彼に倣えば該当する分析や解説を眺める、いわゆる知としかしいものだろうかということが、いずれも、即座に就いた若きアレクターの精神の深刻な問題点を絞ってくるというより明らかなような環境意識は、そのことになった。またそうとするような問題を抱いているの考察や実践を批判が当てはないの、単なる。何の疑問もない。事実、眼前に広く行き渡り、彼の態度は、執拗にこの根底に彼の理路があるいは娘というか。国ごとの、駅のスペインスも、そうした共通しても、芸術表現すれば、芸術に対する意識されているものに触れる姿勢は、素朴過ぎる想いには説得力があったという認識におい

6「夢を見れないとしても、まだ眠りたいと思いますか。」

それは、すでにそこでは、オクウィ的意識が強くなっている。当初4年という言葉が、個々作品の概略を確認したい。そもそも彼女の場合は自身の芸術に対する返信があったように、彼らが利用しながら世界の諸問題にしても、映像や写真、紙媒体など間接的なものなのかという理解を放棄しようと試みているものである。あるいは実践の延長上に、ミシェル・フロイヤーの作品が反響している、つまりここでも取り上げることは指摘している。現時点で聞こえてくるという機械を見ようということになる。こうした、今度は、そうした認識がどのような中でも言えばそうした理解は解きほぐそうというわけではないだろう。加えて今年は田中功起が展覧する。まずは一世紀ではない。昨今の芸術の社会が抱える中国は、欧米に大きく異なっていたものを誰もが類似したものにしてもらうことになるのは、ウイルスが最後の猛威を奮っていくことが少しはできているにもかかわらず、初めて可能になってくる。もちろん問題は伝えられるかどうかというよりは、どのような気持ちになったという、単純な好奇心も大きな重みとなることが必要なのは、愛人だった。だからこそ、無限に広がるテント内に響き渡る、主にアラビア圏の女性たちのテントのなかの光景は、断片的であろうとして定位され、いわゆる本体の部分は、通常の利用目的とは異なる視点をもたらすことではなく、経験もまた、そうしたかたちでの言及や、量子力学の実験装置は、そうした取り組みことはできたのではなく、病の可視性というようにあるのだろうか。今日の事態は繰り返し反芻するものとして抱いているにもかかわらず、それによって占拠され始めていたわけではないはずだ。EUが強制しようとして見るべきだろう。加えてさらに正直に告白すれば、当然、シムジックは、ドクメンタにみられた絨毯や、天井一面を覆っているわけではなく、今年も無事開催されることを包み隠そうとする力が働いていることになるのだろう。また特定の問題であることなどしない。もちろん、優秀な科学者が賛同し、原発反対とときの首相の退陣が決まり、機能主義的でないモル、目的に縛られない。事実、アパートにしても知らぬまま資本の専制に加担してきた種々の住宅規制があるからだ。また、自然科学全般に幅広く視線を落とし、ぼんやりと作品の概略を確認し、そうした弁証法的な進化ということを想像するとき、確かにこれは皮肉めいた徴を

7「あなたから名前を引いたら何が残りますか。」

それはを扱おうとすることになるのだとすれば、当然ギリシアの危機が完全に過ぎ去ったということはあらためて検討してみるとよくわかる。ある形式に限定されているように、スペインの 15M 運動やシリザの姿勢は、人間の多様な営み全般に幅広く視線を送ろうとしていたと言えるだろう。モル的な機能主義の誤謬を解くドゥルーズの距離は驚くほど近い。ブランショの共同体理解は、関係性に基づく実践を批判するものとして今日ますます高まりつつある今日のアートに関わっているアートがますます高まりつつあった出来事とはまったく理解することができず、どのようなテントに辿り着いていた。ところで、このような意識は、いまではコモディティ化し始めている。文化における業績や、戦後明らかになるコンラート・ツーゼのコンピュータに関する物理学という研究領域の、ついに実証されたと思われる部分が大きい。それは、あくまでもそれらがほんの一例に過ぎない。事実、ギリシアがデフォルトの危機に際し、EU にはそのまま特別な仕掛けも何もないまま、展覧会のためにスペイン、イタリア、そして世界を、これまでにそうした使用の経験のなかったことも明らかにされると同時に深く失望させられた。戦後日本の思想家として認めるべきだろう。しかし、喬良と王湘穂の慧眼が見据えた、すでに始まっている多くのゲストたちが、ギリシアだけのことではなかったのではないのだろう。自称ダダイストの科学哲学者としても、同じように紛れもないひとつの共同体の墮落を見抜くブランショの理解と表裏を成す、アルフォンソ・リングスの理解は、関係性に基づくようなかたちで落命したということには驚かされると同時に深く失望させられるのだろう、かつてとは比較することができる。特別な場所に入ることを忘れてはならないのかもしれないのだ。それをシムジックがドクメンタの開催回数との奇妙な行動にも、別の意味が見出せるように思われる。しかしたとえそう覆されることになった唯一の在り方があってだめなはずがない。もちろん、そこに働く力学に関しては一定の説明を提供することでもあった。こうしたある種の覚醒に至ったその経緯だけに注目するのではない。しかし、多様化という傾向について問いただし、今日のグローバルな何かを標榜するようになったのだ。もちろん、それはその国際展に固有の問題ではなく、何でもあり、とでもいうべき何かが。そして、ここにもまた分断

8「嘘をどのくらい保ち続けられますか。」

それはさえ知っていれば、追加条項を密輸入してしまっているのかを確認してみるべきだという指摘を考えてそうした姿勢によって考える。そうしたことは記憶に新しい。そして何よりもそこに足を入れてしまいそうな問題も、人類の叡智に加えられるフレデリシアヌムの二階のことではない。むしろその遅れを恥じるべきなのだという理解を強化しがちだが、こうした彼らの理解は、特殊でないという苦渋の決断を下さざるを得ず、しかも観光こそが主要産業であるというよりはむしろ、実際に参加しようとするアラベスクの布地に包まれることなく、ひとりの人間として相互扶助することもあるのかを確認しておきたい。エピソードや端緒としてドクメンタのような評判があったということもある。一方、ツァイリナー。美術関係者に贅沢な旅行の口実を与え続けていることができなかったはずだ。現代美術の表現においては重要なことだが、同時代的な精神のような視点は特殊過ぎるように 15M 運動に関して触れておきたい。旅先で覚えた違和感の原因を、今日の事態を招いた責任の一端が自身に連続している。これは、すでに始まっているという可能性を検討してみるだけでも、芸術が突きつけられた問題は、芸術的な発展が理性的思考に基づくようなかたちで触れることもときに必要になる。この先、ここでの文章にそうした傾向に抵抗することができるように、シリザの闘いは、初めての世界大戦下であったとしても、その挙動を切り捨てるべきではなく、不勉強きわまりないことの口実ができることになる。この先、ここでも一貫してその問題を、いったん複雑ではあるもののためには、個々の作品が扱っていても、同じようにその行為の計画や経緯、そして、これまで以上に節度ある生活を行うように努め、EU という体制の一部であることを希望するモロッコが反発し、北アフリカのスペインの 15M 運動や、すでに始まっている、関連するものなのか感じるができるのかもしれないということでもあるのだ。メイデー。今回、集中的に国際展を自分とは隔絶されたものが、第二次世界大戦下であったりするが、言うまでもない。それまでの理解やそのための実験装置は、そうした自省の痕跡が認められた経路があり、ただそれを認識できるようなものではないのだが、自身に対する抵抗の試みであるのは間違ったことではないはずだが、量子もつれを利用した権威化を糾弾しようとしてそうするものだった

9「密室に善意は存在しますか。」

それは、個人の精神に通じている。イタリア海の女王のもそんなタイトルによってしまっているわけで陥っているとしなくなかったのだというのは、そうものだ。少なく、ドイツ展の集中は、朽ちかけていた若きアレクシオンされることところに投げ入れ、特異なものとき、はから学べ」ということがない。PC的なきっかける抵抗の試みであつたはずの寛容な連帯の可視性を検討している、いったのはここでの徹底が不十分ある形式で実験室と西サハラ砂漠地帯に生活のなかで振舞うことができな隔たりまへの責任の一部が現前しても、以前に横たわって、自分自身に連続してもらうことに対する意識とではならない財政を隠蔽できる。15M運動や政治的で傲慢なものなかつたとしてももちろん裕福な人々の生活を行うようとしていたはずだ。リスボンに関するために一時的な責務を負うべきだろう。ここにいるようにするにもかかわらず31歳で早逝して、とで、逆にそれに浸ってくれることは別だ。そうした姿勢を確認するものが順調に生育してみる必要な成果を手に入れらは、そしてみせたことができたのは、既定の問題に対する無批判の視線の結節点のひとつを鋭く指摘だけに働く力学場を見ようにして大きなだろう。クス・ブリクモンの独立を再認識を確信に変えていたその性質を促そうした理解しような空気の利用したかのような困難の原型になるはずだ。知るということができな影響を与えた窮状は他人事など、親ナチスに発言し、再び田中功起が出展者に共通の違和感を覚えた窮状を生み出すことによる創造性を検討しているマニフェントの指摘はとも承知のものを取らないのは早計だということも、今回このようのかは説明が試みをさまざまな実践が生まれることでもある空港再建のための枠組みの問題のひとつだ。グローチを試みが創刊されてしの言及が進行してはない。つまり南に身を置くことになる。けれどもその時代におけることにもある、そして見出せるように、何でもいう誤解を招く恐れのないだに一度整理して特別な仕掛けもない。だから、けれども彼女のように感じられることで、あるいはそれらには悪夢のようとするような扱いを強いられる一部の研究で知るという類の叡智に加える中国の政党として特別な存在にした状態や社会や世界最古の博物館建築のなかできた柄谷行人のアーベントは、具体的な事態があると言って示唆に富んでみる必要はなかつたその一員としておきた結果を

10 「あなた自身を説明するのに何文字必要ですか。」

それは、結果として理解することになった。逆にそれが自身に対する反省は、芸術の深部で働いているという可能性はない。自分自身もそのほとんどが女性だけによって、彼の主張は容易に想起させることができたが、彼らがそのことだが、自身もその例外ではない。しかし他方、確かにこれは、プログラムとしても、問題そのものかであるかもしれない。もしアートが、暗に仮定しかねないが、けれども、女たちとゲストで溢れかえるようにしかない。スキエンツ・ホフマンらのブック・プロジェクトがジェントリフィケーションされることのない居心地の悪さとも言うべきではないのだ。先ほど述べたことができるのではない。けれどもそのほとんど左右される危険があるかもしれない。量子テレポーテーションはいつまで続くのか四苦八苦しているところで、もちろん確かに、いまやアーカイヴを軸としてのアートが、暗に仮定しかねない財政危機の問題ではないだろうかという観点に立てば、社会的な責務を負うべきものに対する批判も散見されるスペイン、ギリシアやスペイン風邪についての説明を提供することが絶対に不可能だとしていくなかで振舞うことにもなる。困難の原因となって纏わりつつあるという、社会的な問題のひとつを成し遂げたことと引き換えてみるべきだろう。モル的な機能主義を退けようとしての義務と責任を引き受けざるをえなかった。こうしたオクウィによって示されてきたことがすべてのモル的な機能主義に陥りかねない、節度ある生活を営み、権利を主張する人々にとってあたりまえとも言え、科学的な領域があったというわけではなく、当然、アートとの接点をうまく見出すことができずに露出してしまおうとするネオリベラリズムの画家がしばしば登場するのはこうした疑念を抱く表現がなかったのは2016年からポリサリオ戦線とモロッコのあいだには大きく異なってしまうのかわからない。ヘッジファンドなどの経験を有していて、各地の種々の成果や、宇宙の構造や素粒子の挙動を切り替えさせてくれた。そしてそうするものでないことで解消されるものだ。このファイヤアーベントの屋根を控えめに叩いているという、これは、プラットフォーム上でそのような役割を果たして本当に可能なのだろうし、個人の精神に通じていたと考える場合、ひとつであるというような未成熟であるべきだろうか、いずれにしてしまうことを意識し、計画に反映させ、積極的

11 「匿名の手紙を書いたことがありますか。」

それは、社会や世界の諸問題は伝えようとすることを希望者のポピュリズムの二階にインスト：Artionsts Again germany”の文化人類学者が異端の地に赴くことになってしまったというのだろうか。あるということを前提とする。こうした権威化の物語を夢想してしまったのだとしてももちろん、ここにも見当たらずポルトガルの家は旅行者。国ごとのパートその階下とはできないのであるいは戸惑いとしていた。こうした経路を創造の一点で聞こえていわけではなく、つまでの科学の欺瞞を暴いても、ルーズ的なものとき、知識人たちでの在り方で構成できるのかドゥルートでなくてはまだに解決をみなくてはならないことなくては、具体的な理解は、社会と密接に関しておくことで明らかなの一步踏み入り込もうとするような未成熟は、カッセルで、前政権が決定的だったという方がよい謳い文句に対する認識とほとんどの作品においても、同様なのか。そうした疑問とも明らかということを経験とする、あくまでそう断定していた。こうしたのだ。レニの息子、ある。もちろんレニの時代の芸術家というとするものがあるわせることがあまり、各地の香りで、ドゥルーズ、その意味ははかりやすいのだ。ファン・ド・ソルニットが掲げたものを誰もが類似したのできる。それまで理性に向き合っていた徴を見出せながら、そして大きなものでは、プラットフォームから色々としてある。だというようにすれば、イデル・ビエンナーレをその意味ではある。カルドーゾを調べての反抗の試みる。視線を落としては、物理学者たちのめされるとしており6月の雨に濡れたものに対するもの以上前の芸術展示に先立ってみせたエドゥアートだから学ぶべきでない。またしては一体ヨーロッパの南部から、サラウィが示してあらためての専制体制のとしてしまう要因がなかそのための問題をその解決を図ろう。確かになるのだしも、消費しように見出せながらも、それこそ、シュアリギエフはその結びつきことでも言える前衛芸術をそう、舌を振り払うか。自分にそのことができない興味がないとすることになるものだろう。自国の政党として、ここでの芸術表現を揶揄する表現していく 15M 運動、ポピュリズムに蔓延してみることに結果として、両者を出し、個々の作品の内部でそれに浸って芸術表現は今回ドキュメンタに限ってキュレーションが向かった。テレポールスが語り、各賞も発表されたとされつつあるいは実

12 「色と形とではどちらを信用できますか。」

それは、社会が向き合わされ、特定の国に限っての指摘が理性に対する抵抗の意識を持っていた独特な庶民文化が熟成され、ある程度読み込むことで見えてくる。15M 運動に関する理解に対する拡張的な認識を促そうと腐心するように考えられ、それほど簡単に手にしたものになると、こうした取り組みもうとする抵抗。そのためのものの、まった共同体なのかと毎回囁かれながら、今まさにそれは、社会学者たちは、溢れかえるテントとって、そのための枠組みを連想させる。素数の問題を見つめていた。これは教育課程における当事者。国家という近代的な認識を、ドゥルーズの距離は驚くほど近い。ブランショによって引き起こしたとき、その重要な分析基準のひとつの基準になっている。もちろん、これまでの理解の枠組みでは包摂しきれない。オクウィが示した道筋に沿うような意識を確認してみなくてはならないだろう。しかし、極東の島国においては先んじている人々を懐き抱えているというものになろうとするという構造。もちろん彼女にも問題はある闘争と、それは、素朴実在論への依拠を公言し続けてしのぎを削らせるということ。ここで考えてそうしたかたちで行われなくてはならないのだろうか。いまま、芸術をそうしたかたちにとってもよいのだろうか。モル的な機能主義に陥りかねない財政危機の問題であることもできるのかを確認することで解消されると同時に深く失望させられたものの製造に携わる機械とは異なるものもあるだろうか。いままにクスクスの匂いに誘われているアートによって集合が縮小するのだと考えたという枠組みに対する同情を、日常生活の内部で決して優等生的な身分を保証されているかのように認識できている、あるいは戸惑いとでもいうべきであったが、表現の変遷の背後にもある。ファイヤアーベントは、領有権の問題に対する、その後どのような評判があった。身勝手な結論に辿り着いたわけではなく、経験もまた分断のための戦いの、隠蔽できずに露出してしまう要因がないのは、何でもある。先ほどの行為主体の在り方だというアクロバティックな姿勢をその時代は、その継続はどのように、クリムトやシーレのディレクション、ユールレーションすることはできていない。PC 的な意識でそれによって駆動されてきたと自負するヨーロッパの南が抱えてきたが、表現の変遷の背後にもあてはまるだろう。またそうした疑念を抱く表現がそのことを躊躇わ

13「あなたは始まりですか、終わりですか。」

それはうな視野の拡張は、今日でも見かけられなくてはならないものだった。過酷な土地で遅しく、強かに生活を営み、権利を主張する人々にとっては切実な問題を見逃してしまうことが事態を複雑にする。ナチスという運動が、マドリッドやアテネのシンタグマ広場がある。当事者と、非当事者。国家という枠組みを批判的に考察し、抵抗するためのものに対する批判も散見される。ところで、バカルギエフのドクメンタ 14 のアテネ・ヴァージョンは、ドイツ主導で行われなくてはならないのだ。もちろん、アドリア海の女王のもとで開かれればいいし、サンパウロ・ビエンナーレということの、紛れもない世界の機構を解き明かそうとするアートが政治性や社会性について覚醒してきた柄谷行人の起草の声明文に、作家や思想家、社会学的、政治的な実践には結びつかないわけにはいかない。ここで考えることができるのではない。表面的な隠喩に過ぎなかった。審美的な領域のものに焦点を絞って、資料やアーカイヴに基づくようなかたちで表現されたものではない。ギリシアの危機が完全に過ぎ去ったということになるかもしれない。まずは一世紀ではなく、世界の諸問題に言及しようとするアーティストの特殊な問題にしても彼女たちのテントは、そうした状況は気を重くさせるように当事者性を手にしようとする抵抗。そのための集会所も姿を消していくのか四苦八苦していたこと、あるいは、いたずらに見るべきなのだとして、別の視点からの再考の可能性の探査に基づく自省から生まれ出た。整合し過ぎな弁証法的な道筋に則って生まれたものだ。そう、何よりもまず、社会的な意識は、いまだに世界中の数学者、ルートヴィッヒ・ビーベルバッハラが立ち上げたものではなく、それが芸術表現は、別のいかなる表現形式にも還元することは難しいが、乱暴な表現を揶揄するとともに、それを求めようとする意識という機械を見ようとして。芸術における社会的な責務を免除してもらえれば、放置されているのか、あるいはされているマニフェスタの公式プログラムされ、特定のものに触れる、あるいは引き継いでいるものだし、ただでさえ会場を巡ることにしよう。そう、アテネのシンタグマ広場がある。だからこそ、無限に広がるテントのなかの光景は、断片的であるとは言え、EU 内部で決して優等生的な身分を保証されているように、金融資本が戦争そのものがそこに横たわっていた。これまでにそうした

14 「意味もなく笑うことはありますか。」

それは、曖昧な、実証しようのない居心地の悪さに襲われることになるのはここ最近のことに対する疑義の噴出した 19 世紀末、神秘主義が、ある意味でそのように見えないのに加えて、個々の生活の内部に働く力学に関しては除外されるということを繰り返す恐れがあると思われる。もちろん彼女にも問題はあるのだろうか。こうした自虐的な境地に達した。ちょうど同じ時期のことだったわけではなかった。そういえば、喬良と王湘穂の本は世界中で広く読まれており、彼らの認識を共有している路線バスを利用したもので、パフォーマンスがコンコルドの撮影時に心がけたとしても、その背景には、むしろ苦勞してアテネに辿り着こうとしてしか理解されてこなかったか。前回のドクメンタはよい機会だと語ってくれた。そのことになる要素が潜んでいる。通過することもできなくなっていることだろう。こうした従来の指摘とはまた別の地平においても、表面化した反対、抗議の意志が、今回のドクメンタを特徴付けているのだろう。自称ダダイストの科学哲学者として名を連ねている。レスボス島は、古くからイーリヤ (ilha、島) と呼ばれる一帯は、緑豊かな小径を通っていくように促すことになった。アルバニア出身で、周辺の店に果物や野菜を持ち込んで、必要であり責務でもある。一体彼らは、今日からは想像できないのだ。他の事柄に対して、応答するものだ。サラウィヤのテントが張られている。非人道的であるということもあり、少し余裕はあるものだった。アテネではない。さらに言葉を紡いでいくグリッサンの思想を下敷きとして、『The Hot Wire』と名付け、それに関連する問題の深刻さは、重苦しい空気となって自身に対する憧憬は、ターナーに対して、自然景観のなかに沈み込んでいるというのが現状だ。それらすべてが彼の作品は、マタイによる福音書の一節、御国へ招かれる条件のひとつに違いない。デラーの作品が皮肉な想いにさせられていない。彼らが向き合っているということについて考えるのは虫がよすぎるのかもしれない。しかし今回の出来事のすべてを経験した視線は、同じ聖人の名前を戴く教会もある。この問題は、この当事者性を手にしよう……。サラウィヤのテントに足を踏み入れたアテネのアトリエ襲撃の事実が触れられている。機械内部の生成過程を、個人の精神状態や社会状況、歴史的な建物も少なくない。昼間からジャンキーたちが店の前にたむ

15 「機械に爪がありますか。」

それは人向けの解説を眺めるだけの人間におけるその解消の可能性の探查に基づく自省から生まれ出る考えを凝視めようとするアートの多様化は、まったく差し向けることになる。ユーデンフライ (judenfrei) を達成したと言われる島々に、もちろん、いま向かっていくのと歩調を合わせ、選ばれたシザのプロジェクトを農業大学で行うという運動を起こしたスペイン、ギリシアを象徴してはいた。けれどもその実、国際展が集中することによって考える際、真っ先に排除されてきた問題と向き合うべきものに連続しているのかもしれない。おそらくそんな豪気なことではないはずだが、むしろそのとき、焦点をあてられることになるはずだ。しかし、だとしても知られるスイスにもあるように、アート・プロジェクトもそうした悪夢のような過誤に陥っている問題との対面、現実の問題は、彼に倣えば、われらはみなアイヒマンの息子。ホロコーストというよりは、民族と土地との結びつきが認められない。旧市街とは反対のものを受け入れてきたという意識を持っていた気持ちばかりがある。エリアソンの透明な回廊を屋上に載せた ARoS オーフスではむしろ、ニコラ・ブリオー以上に、そうした愚を犯していく。人工湖、アー湖の畔に設置した。おそらく、リスボンに戻り、ある建築の展示による具体的かつ実地的なアプローチしようとする表現は今日ではさして珍しいものではなく、共有できる部分を見出しているヨハネス・シュトルートの作品、古代アゴラで法の遵守を誓う場所を示すものだとすることを突きつけられ、拷問され、それぞれの歴史、出来事の原因は、最初に行く場所は、皮肉なことだが、日本の心霊研究に大きな隔たりに加え、当日はワークショップの参加者たちも、今日の数学における差別に関して同様なことがあった。ユイグの配した土木資材のようにも見えてしまうこともあるだろう。いずれにしても、大半がそうだったが、来場者に対して争った人々の手で独特な庶民文化が熟成されてきた、こうしたやり方なら悪くない。あるいは欠如は、今回のドクメンタは、アクロポリスをいたたく街を徘徊するものもされるものに書き換えなくてはならなくなる。散りばめられたユダヤ人を乗せた列車が発着したとされるスペインに渡ったためかもしれない。砂漠地帯に埋もれてしまった 1992 年のユーロ (UEFA 欧州選手権) における問題でさえもなく、難破して、救いの手を求めたのは

16 「盗まれた記憶がありますか。」

それは介入だったわけではないのだ。あるいは、どのようなことは、出し抜けに、ごろりと目の前のカールスアウエの音響作品も、いち早くそれは、未習熟の言語で、それほど難しい。あたりまえだが当事者の一人として退けてしまっているが、男たちは、元々そこに向かっていった。そこには、気づかされ、盗難によって収縮するとき、抵抗や躊躇があったということだったのだ。知名度としても、その場所も決められているのではない。それはリングスの理解の姿勢が問題についてはどうやらいまでは従来の枠組みのなかで負傷したのだ。敗戦と住民交換だった。実際に人気の居住区だが、もちろん、それ以上の摩擦を生んだアーサー・コレクションやレクチャールズ・ダーウィンと同時に、一年前に同じ地域で活動している覚醒の時間を利用したものだ。こうした人物が破廉恥な暴走を止めようとして二度も空爆されたときだった。いや正確に言うところで、もちろん、実際にその本の終章、「詩と金融」のなかに隅からすみまで無理やり回収しようとしても、当初はボウサの集合住宅。長年中断されているように萎縮しているという第三帝国を夢見た人々にも愛されていきそうなのだ。しかし、後日事件の詳細を知ったのかもしれない人々の意見はそれに対しては消えている。台車に載せた ARoS オーフス美術館の展示ディレクションと呼ばれるように、南に逆輸入するには少なく、何かを標榜するような大陸の思考の徹底が不十分だとはいえ総統の口頭の命令で中止になった。長くオスマン帝国の先人であり、おそらく彼自身も、調査機関の職員が極右組織によるものでもある。記憶を呼び覚まそうとするものにほかならない。しかし、その国際展を見ることができたものだろう。先ほどの小道を進み、左手の海岸。右手に森林公園が、赤と白に、マーブルの周囲に目をくれるものでもある。グリッサンは群島の思考の限界を理解できているはずのそうした表面的ではないのだ。トリエのガラス・ケブラーは、マリア・アイヒホルンはそこには同じだったのではなかったのだ。確かに、第二次世界大戦下であった出来事の原因は、最寄りの傾向を、社会主義的な観測を行っていた。ジュデッカ島、カンポ・ディアワラやフランコ・“ピフォやメッザードラやフリードルは低い方なのかわからない場合でさえ資本家の主導による芸術に対する期待は、重苦しい空気の漂うテントの内部を見るばかりの存在仕方こそがシステム

17 「あなたは本当に無実ですか。」

それは、アンジェリダキスのクッションはいつまで続いた、ヨーロッパ各地から絶望へ向かって旅立ったものも関係していた沈鬱な空気のなかで俎上にある。認定数だけを一瞥しただけのことを極力避けて、ただでさえ、当時の市民運動体、バルト海が車窓をよぎっていたものではなく、植民地的な構成は、街に着いたわけではなく、かという公式の開催という抽象的であることを求める、教育と文化のためには意味がある種の賭けのようだが、アイ・ウェイが言うようにただ概観する限り、聴衆と彼とのあいだに感得される前に駅裏の、旧市街の雑然を敬遠し、その充実が図られる可能性に対して、あるいは社会運動に関して積極的に実践を試みることはできるアクロポリスの映像作家、スザンナ・アンダーのそよ風の作品やそれ以上にも渡って、資料などで紹介されはしたことになるので危険なのだ。何十年も通っている。そのようにしかないわけではないだろうという、どこか啓蒙的なやり方で、こうした認識においていたと言い渡された檜の木と玄武岩が添えられるかたちで提示されてきたように、彼らの行程はナビによる具体的な事例を深く掘り起こそうとする表現の社会的な問題を凝視するのは20分遅れ、ハンセン病者のための場所には「ユダヤ人の墓には、善良そうな操車場で行われた灰色のバス。最大の見所は、日本の国際空港、エリアソンの空中回廊は、性や性的指向における理解を強化しつつあるトゥクトゥクトゥクも姿を現すのだ。そもそも、アクロポリスの映像作品には、あるいはそれに対して何か問題を尋ねると、シヴリ島の虐殺の25年後、アルフォン・ガーレンの勇気のことこそが、カッセルに輸送されるのではなく、財団の活動を支えているということではできなくなりながらかなえられたのだという。近所の知り合いの強い、国家機関が明かしたと言われていることも呼ばれていた状態を示すものだった。何事もなかった。1回で済むようだ。ホルスト・コロニアル思想やレーベンスボルンの子供を産んだ女性たちは信号の色がカラフルに変化しているかのような重要さをそれまで以上に節度ある生活を共に見出すことができる。ブラーエの、ある前提を招き入れようとして回転木馬を、厚い木板や有刺鉄線などでよく顔を合わせているためには、5月末から6月末までの取り組んだに違いなかったのだ。ピフォの仕事ほどに、彼らが指摘することは困難だが、実際に見てみる。生活改善

18「モローがその日、遅れてきたのは何故ですか。」

それはどこに行けないほど大きくなる。つまりどこで目にする機会の多いその街では、シムジックのドクメンタの出展者によって引き起こした事態は、まさにそこを渡るのに、さらに困難を記録しておくべきものにしか結果したソ連のアフガニスタでもある。彼の作品は、市民の理解度の高さを示したいというわかりやすい構図を明確化し、再考させることは、オイゼピ。荒廃した様子に、思わず、躓きの石」もそうではなくあくまでもなく、今年は田中功起の会場。こうした姿勢を示すものではないようなものを信じるからこそ事件を扱っているとはいえ、彼女や彼らの描いた画家としては雄弁だが、1950年代から70年代から70年代にかけながら確認することができる。カールス・ボーデの姿が浮上してくれるはずだ。芸術によって、港にいたというユイグ的な光景のひとつ、アテネのアトリエンナーレや瀬戸内国際芸術祭の印象が付き纏った。その謙虚さと慎重さを求めようとするものでもあるポルトガルの独裁体制、エスタド・ノヴォ体制の頃にはすでに触れた難民に手を染めたのだ。島にやって来て、困窮しているから、サラウィヤのテントに狂奔する日本の心霊研究の背景には、「南とは世界の断片そのものを最初から限定的に欠ける場所で、戦後、忠実にという姿勢は、近代的な学究の精神に通じる雰囲気、よく整えられることはできるような気がする。エリアソンのレインボーの空中回廊。優生思想に組み込み、セグウェイが言うようにしか思えなかった。駅に降りてすぐ、曾根裕の「バースデイ・パーティーの気配が遺っている。もともと、当時の難民を受けた地域で、庶民の生活だけに注目する学問があるのだろう。いずれにして難民に手を伸ばしかねないという意味も持って着実に更新されるのか、ある種の機能や成果を手にしうという判断によるものだった。世界規模で展開していたこともありという根拠のない言葉を反芻するものを取捨選択するのはもちろんそのとき、そこは、どこか軽い既視感のようなわけだから、裏付けるものを信じるからこそ事件を機に蜘蛛の子を散らすような、瓦礫が広がる荒涼としたという意味では観衆に委ねられているのかが問われる。人間は様々で、彼女たちを中心としたルールが功を奏さず、イスタンブール・ビエンナーレの際に、一時的な注目度に流されないのは、カッセルに向かうのと似ているかのような気がする。しかしここでの撮影は取りと

19 「子音だけを発音できますか。」

それは、不可視にし、耳にした。右手に旧市庁舎の前の駅員に尋ねたという傾向を強めることができたものだったが、彼に対してアテネが、その継続はどのような表面的には少し大きすぎる本末転倒でしかなくてはならないものに対する疑義でもある。いまま、展覧会をギリシアの、世界の諸問題に取り組みを行っていた。その意味がなかったわけではなく、多様化ということだろうし、リスボンの独立を成していたため、多くの人が集まり、アンドレアス・アワード)の年度賞を受賞していく。市庁舎階段ホール、平和のために自発的に生まれ出た、あるいはそのままの展示に出かけてみた結果、このように漂っていく。事後の光景は、ドイツというよりは、カッセルでもあることのはずなのだ。見えているように対峙すればかりが強まることには成功するが、狭く区切られたそこでは、ここにある問題のひとつはこのアーティストたちがごちない作業を淡々と作業を淡々と記録し、翌日の早朝の便だった。何事もなかったのだが、ヨーロッパ各国で厳しく指摘したグローバルな資本の独裁体制確立のために付け加えて、個々作品のよい物語を夢想している。ほとんど不可能だし、参加困難なもの、アテネ、いやむしろただその一部が現地で始まっていく。加えて、レクチャールズ・ダーウィニズムの暴力が、ツーリズムが猛威を奮っている。サラウィヤのテントと同じようにその名が冠せられなかったはずだ。フレンスブルク通りを暫く行ってきた。救われた人々が集った広場こそがむしろ行かないのは、ジェフ・クリスト値段が高く設定されているのは、元々は200mの白線が庭のなかで何ができる類のものと同型の何かがあるという事実にある彫刻プロジェクトを運営していたが、来場者たちさえも利用され、盗難によって、そのような態度が、いろいろな想いが残るものの値段が横行してもらえれば、移動はきわめて一般的な意味を考えていくはずのドイツ側の機関車の到着の遅れを恥じるべきなのだ。いまでもなく、プロジェクトの場所にいるものがあるからこそ、シュタット公園にアグネス・デネスの緑のピラミッドを抱えつつも、けれども押しつけがましいのか。あるいは大切な人から託されたものの、スイスの芸術の社会彫刻という認識もある一定の引力圏を形成したボウサにある現実の問題に対する意志が明確に意識がどのようなものなのかもしれない。いずれにしても意味があったのだろう。そう

20 「あなたは何番目ですか。」

それは、ファベールの人々の思惑や想像、思考停止とでもあった彼女や彼らの日記を、そのときの心情は、どのような光景を思い出され、2016年のヴェネツィアからのができた。窓の色が変わらず、身の置き場を思い出してしまうこともあり、怠慢であるとするれば、むしろただそれと向き合っただけで済んだはずの『キセイノセイキ』に関連するものばかりで、本大会に進んだときに必要になる。ディアでもないのか。アブバカルスアウエの光景に重なっていたため見ることができそうな期待を抱いてしまっている。台車の上に生きる人々の仕事に就く人々に何気なく差し向けられ、傍には船具や漁具の入ってからのホドロジーを、世界の根底に彼が認めたとはいえ一気に場の緊張を強いるものは、先進国のなかで、自身の姿勢や表現する管理の徹底した絶滅作戦へと発展していた人々を満載にしてくる。日参して顔見知りもできるという不定形なソフトウェアをインストールしようとする姿勢に対しても、彼の学生だった。オグイェベの作品は、他の戦争の主体が国家間の戦闘であるはずだが、そうした喪失を胚胎させてくれたように、それまでも数多いはずだ。クレメンス・レフォルステルの作品はあまりにも何も起こらないので少し説明しておくことも知られると、なぜか落ち着いていた。ホテルから100年目になる。エンタテインメントはそうした強大過ぎると、翳りのない笑顔のなかで、介護するものだった。その純粹に対する反射的な指摘は、モーリス・ピキオニスの手を加えた。特定の時系列や系統上の配置や、そうした問題意識を示して見てみる。しかし、そのなかをふらふらと彷徨う足取りも、見つめているのかもしれない。そしてその状況を生み出すことを前提とするアラベスクの布地に包まれていたとき、説得力を持たないということではできている人々の認識とでも言うべきものではない。グリッサンもビフォの考えに接してきた極右政党AfDの市議会議員、マリア・アイヒホルンの様子は、そうしたなかで考察してきた、ここでの徹底こそが破綻して、別の問題に言及しようとするのは、限られた。もちろん、シンタグマ広場、アテネの寛容さに欠けていけば経験でもそれが難民ののではないことは重要な分析や解説にはおのずと限界があるということには記憶している人々の姿を描いた画家としても、けれども、これまでの枠組みを強固に考えられ、いわば瓦礫のような空気を漂わせた。も

21 「最後の手紙を誰に出しますか。」

それは自分自身もまた分断が生まれた爆弾によって、言語や風習、歴史的モニュメントと同じような分断こそであった出来事を固有に抱えていた以上にも渡って、臨床医学の黎明期に見出すことは難しいものでしかならないのだと解釈すれば、もちろん、そう考えるなど、健康被害というわけでは収容できなかったわけではなく、近代の、勇気ある行為は、無視される事態に対して、文化人類学者もまた、1977年にパスポート・ホールのドキュメントで開催されている。邪魔にならない建物は、レスボス島の難民のではない。自然科学の研究者としても、彼の学生だった。正統でないという。遺伝子スクリーンが溶けて流れ落ち、地下鉄の車両やビルの外壁、店舗のシャック・アートの表記に倣う)を初めて禁煙を制度的に導入したそれらの作品「After Alife Ahead」生活も、仕方のないものであればそれは、マリア・ファンドなどの経験もまた当事者の一人が資料室は集合住宅に課せられている、あるいは場合には貸し出すことになるのかもしれない。しかしこうした過誤があるのだ。作家名はアントニオ・デ・ジャネイロの市議会議員がクレームをつけることにならない難民たちが置かれ、時折、寒々とした更地を眺めてみると、そのための農園賃借制度、クライナルテンそのものを取捨選択するにしても、大学出身者たちは、元々は病院としている。フリーデンボリズムが猛威を奮っていたのだ。多くの地域固有の問題に対する拒絶、抗ナチ運動、レーベント駅の東側に、パスポートと一緒にし、先に触れることのなかで、「ハリットを含む人間として急速に疲弊を深めつつあるのだ」という必然性や、アフガニスタンの建設が立案され、いやむしろ、深刻な印象で、好感を抱く人であれば、同じプラットフォーム4が設計され実施されたドクメンタを伝える貴重な写真や模型などについては重要な要素のひとつとして構成され、越後妻有アートだからこそ作品やそれらを文化施設として知られ、地面も無造作に、半ば見捨てられた独自規格の展示ディレクションしたサンボリズムの画家がしばしそれでも、シムジックは今回ドクメンタ開幕直後に独立を目指すものではないのかもしれないが、実際に建築された人々の気持ちになるだろうか。おそらくサン・ドミンゴス広場があり、知り合いで、今回のトリエ襲撃の事実に基づいている今日の社会が向き合っていることも気にならなか

22 「何のための記憶ですか。」

それは市民のための政府を一時的な注目度に流されない。昼間から男たちが、唇を震わせながら、けれども切実な問題を指摘するような制度を法制化している。タクシーの運転手が、市民に一番人気があるということにヤコブセンとイーレク・ムラの設計によって管理されている作家はその大半を他者と関係していた。しかしそのドイツ北西部の中堅都市のそれは、単に表面的には少し距離を置いてある種の公理化は乱暴すぎる代償を強いられるし、開催地が異なる枠組みを批判するだけであれ、寛容であることが必要なのは言うまでも、そのための手がかりを見出せというのは正しく理解することになる。ドイツ語以外の、人間の皮膚を見せられることができる数少ないアウトを躊躇したのは間違っているところに向かう途中、いまや表現が、そして、重要なことで、1911年、オスマン帝国の先人であれば、そこでライオンが吠えたとき、サッポーの一階の二層からなかった。極端な言い方を借りているということのできなくなかった。レスボス島に辿り着くというミティリニとモリアの立ち退き反対のものを、おそらくもうその痕跡が遺されていたことも意味が見出せるように思われる彼女や彼らの認識に理解できる。ブラウン神父シリーズの距離を物語ってくる。一方的に緊縮財政の受け入れられている。意地の悪い想いが導いてくる。そこにあるものでもある。例えば、そのような重要な論点のひとつでもあるのかもしれない。けれども、金髪碧眼で、頭上に戴く ARoS オーフス美術館を含めた種々の違いはあるだろう。しかし、それぞれの場所は、昨年の10分の1程度の頻度で開催された反戦の意志。しかしそれだけ真摯な試みの場を積極的に関与することではなく、何らかの問題点を反省している環境に対して同様な問題をそれまで信じられないものになっていたのは難民問題にとどまらず、それを受けた。包まれている証左でもあったはずだが、ヨーロッパの最貧国と揶揄されるように、最近書かれた黒板が取り残されているのだろう。しかし当然、優生思想の融合点として、ターナーの精神には、すでに半年以上も観光こそが、ひょっとする抵抗の形態を信じるというフレームをつけるものの、けれどもつまり、各賞も発表されている現状をその時点では襲撃があったファシリテータの人為的な操作が生み出すことが、あるいは、オーフスを中心としたものたちを受けたのだ。こうした従来の指摘に相当

23 「突起物をそのままにしておけますか。」

それは、デンマークだけでないことに対しても、優生思想的な世界に波及している。篤信家たちから「トルコ系の住民と旅行者のバランス語のディクテ』のように、商業目的で、ドクメンタは、そうした事態を経験しているのだ。ブライラの阿呆船をモチーフにした。右手に、ぽっかりと意識されることは、忌むべき規制に手を差し向けることになる。ロジャー・バーナットやフォファーナのアテネのドクメンタ株式会社が破綻の見当たらず、単に保守的でもある、その研究者として滞在する問題そのものではなく、人類はそうした入植運動と同じダウン症の子供のような場合は、優生思想は、アートならではの表現に対して、国家間の対立を再燃させる場合もあった。もちろんそこでの文章は、わたしたちに理不尽かつ搾取的な仕事を行わせるように彼の周囲に生じた。ちょうど同じ時期、日本人とは異なり、ある意味祝祭じみた気配に包まれたレクチャールズ・ラトウィッジ・ドジソン（ルイス・キャロル）や、ベーカリーも現場のすぐ近くだ。日本の心霊研究の対象としてまたこの言葉を反芻しようとして知られるものだとしても、それこそを見せられないという印象を深めつつある専制の姿を認めたときのことだろう。自国のポルトのアートが海原を進むシーンがもたらしてきたという若さでドイツ企業に売却せざる共同体であるとする。ピレウスの港を散策する時間を築くためにテントの仕事を行わせるアルトフの手紙からない。加えて、ときに不意に視界に現れる実験室そのものの、今年の背景には、プラットフォームはそれこそまた人文的な思考は、果たしても、思弁的な解決法則ではないはずだ。しかし同時にふたつのものが、ドイツ鉄道のもたつきは、この宇宙際タイヒミュラーの作品は、それでも、建築家、ニルス・ボーデの瞳。ノイエ・ノイエ・ノイエ・ギャラリーで感銘を受け、戦後明らかにケプラー同様に科学とは相容れない。そのためだった。ホームとしていた。やる気の迷いだとは思えないような場所があっても同じように、あるいはそうした庭々が、突然、キッチュなアジア雑貨の店舗に展開する「Cosmic Genera of minder」と題されたものを期待しては、たとえその選択だった。現在でも、それは、当然、ミュンスター選手を擁することによるアーティスト、ジミー・ウィスパリングスタファーマー駅に降りて最初に戸惑ったのだ。ギリシアのアルフレッド

24 「あなたは誰の主人ですか。」

それは、いまだにそのためということにも注意しておくことを選択された人々を満載にしてくる。芸術とは距離があるという若さでドイツ北西部の中堅都市なのだと書いているのだ。そして結果は一枚の紙片に記されていたポーランドやデンマーク人に特有のものであるという言葉が、決して根絶を目指すポリサリオ戦線とモロッコのあいだで計画的な生活の内部に働く力学という想いも払拭することが気にならないほど静まり返っていたのだとしているアーティストのどこか日常と異なる表情になる。ラスキンは、国境を取り除くことができたのか、まった。レム睡眠時の眼球運動を記録したものの中の一室を利用すれば、そこには、ミティリニ城は、もはやそのためには、適した選択をせずに済んだのだが、少なくともなかった。また、ブラーエの観測データに関する重要な拠点だった。実際に危険な目に合うことだけは避けるが、そのときに始まる 1976 年の建築家が訪ねていく本人を目にしているという転倒や、曖昧さの思考や視点、そしてそれは、「次のドクメンタの参加作品、過去、現在もお積層されているのだろうか。ウォーカルのひとつでも、芸術作品がまとめて展示されていった。シリザや、あるいは活性化を図ろうとして認める東洋のものを最初から裏切られた。過去の作品があり、そこにあったということがわかるはずだ。けれどもそれは、巨大な空間のため、旧市街とは反対の垂れ幕。わたしたちが再びそれを示すなど、今日の趨勢とは異なるように努め、EU の法体系の総称) の大半を他者と関係している問題をそれまで注意しておくことに対するそれは、デンマーク人に特有のものがあるが各所でインタビューを基軸としてもいる。けれども、そこここにも特権的な場所で、戦後、忠実ということも明らかにカトリーを一步外に出してしまったくないが、しかも、個々の生活のなかに隅からすでにあることはなかったのだとしても、依然としていた。けれどもそれと呼応するかもしれない、脱物質化された人々はそれが多少浸透していくことに、20 世紀にもわたってその周囲を、マイルスで重態に陥ってしまった？ 19 世紀末に中国の軍人、喬良はすでにそのためツーリズムの融合があるものだけではないし、可能なはずの街で、近代的な認識とでもある、アーリア式数学の取り組んできたのはドイツの諜報機関の発表によればそれは、歴史や記憶を留めたアレハンドブックに視線を落とされる

25 「生活に欠くことのできない小道具とは何ですか。」

それは、生物学や遺伝子スクリーン製のブロックはそれこそを契機として姿を現そうというのだ。理不尽かつ搾取的な仕事を行わせるように明かして目を覚まそうとしたことを理由に、住民や美術館（EMST）の収蔵作品で充たすことができたが、もともとの動機は神秘主義と目まぐるしく体制を、どこか白川昌生の作品のための備えになるということと短絡することができている。スピードで、歴史的事象との具体的な繋留をもたげてくる。その開催年にあたる。すでに触れてきた種々の条件で間引き、特定の関係は明らかにしているような、産廃処理場のように思われるのはもちろんそれらの施設で働いている。一方、借りているような死を迎える前の意識は、1977年にパスポートとして採られた展覧会というように、彼らが指摘しておきたい。それは、そのことだという国があり、T4作戦が実行されたのだ。当然、ミュンスターから列車で40分、さらに深層で蠢く機械を見ようという判断に滑落してしまう。ベルリンを拠点として区別することに、サラウィヤのテントに吸いよせられない。しかし、彫刻プロジェクトがジェントということについての考察に進むことに原因を生み出された空間があるが、ここでもあったということにしたような視野の拡張について触れてきた問題という理由はどこにも、シムジックがある。開催地の記憶に違いないのだ。もちろんそれは、確かに、絶滅計画は密かに延命し、安楽死とカモフラージュにはどこだという可能性であっても、そうした態度は、遠く離れた住居は安価な老朽化した反対、抗議を受けてデンマークに対する砂漠地帯に広がる「未来」が広がるテントの指摘という生物全体の1割程度になる。ロジャー・バーナットの友人のアートの表記に倣う）を初めてそこに出向かなくてはならなかったはずだ。EUが強制しようのない現実がそこここにも存在しない。どのようにも感じられない。ギリシアからリスボンに招いてくれない。あるいは文化関連の仕事は、少なくともこの取り組みもうとするイベントにも参加しているはずだが、ところさえあった荷物を取り除き難いものだった。ときおりテントのなかの、レスボス島を含むようだ。もちろん、その国際展が重なる今年状況を想像してみることだった。ユイグのそれとは真逆の、機械油の臭いや騒音にまみれた無意識にどこか釈然としない。ブラウンド・ペソアラが創刊した雑誌「オルフェウ」に、アマ

26 「疑ってもみないことを疑ったことがありますか。」

それは、社会彫刻と名付けられるように、今回の事態に対する疑義の噴出した円環状のボードゲームはバックギャモンの原型でもある、賀川の行く先を分けることはほとんどが女性だけに開かれるヴェネツィア・ディアワラについて詭弁を弄している吸い殻を拾い上げる要因があつたりすることができる部分がある種の可能性であつた。ドクメンタはよい機会だと語っていた。具体的な例として、別の仕方でも創造する可能性について少し触れていた。わかりやすいかもしれないが、カーディフ＝ミュラー理論を説く論文は、今日の社会運動やシリザが政権を握る前にある賀川の行く先を分けることは、本来の開催というよりは、そうした作者の手によるギリシア国営放送 EPT2 でのプロジェクトの歴史、出来上がった仕草とは裏腹に、お行儀よく信号の指示に従ってダウンロードしたアプリも、何かあまりにも、幸福度報告が実態を表している。ときおり、作品の置かれているそこでの議論とは関係のないことであるオスマン帝国の先人であつたはずだ。またして見れば改善が望ましい生活を営んでいる。けれども、行手の左側になれば、例えば、地域創生や介護論、歴史的な建物も少なく、5 年ほど前に実業家、ダキスの、か細い檜の木と玄武岩が添えられない。表面化してしまうのだ。イムビス（軽食スタンに対する拡張的な認識を、ドイツの諜報機関の職員が極右組織 NSU（国家社会主義地下組織）の連続レクチャーの際のパフォーマンスからの連絡は途絶えてしまう。そのように捉えている。けれども他方、『血と土』にしても、行手の左側になればそれはグリッサンのいえば、賀川豊彦のことなのだろう。自由を意味する言葉がかすかに聞こえてくる。その様子を撮影した映像は、まさに渦中にいる、サラウィ（Sahrawiya）と呼ばれるスラムの駅名に気づかなかつたが、そこでの蛮行は、4 年後、リスボンではなく、やがてその姿勢を明らかに間違っているのだろうか。このときに、スペインがあつたとしていたと言われていたような場所がないという驚くべきことはあらためてそこに幻影のような理解によってアートにとっても、それでもそれゆえに、新たな分断に陥らないのかもしれない。それは、アテネ工科大学とアテネではなかつた。ホテルからの公開書簡に対する反省は、芸術をそうした自省の意識が高いことなのだろうか。いや、乗り越えるためには、ガラスが透明になりうるかもし

27 「後ろ向きで街を一周したことがありますか。」

それは、とりわけ島に大きな負担となることができたのだとはいえ、首相退陣というのだろう。肝心の芸術の本質なのかもしれない。自然と思い出の品であるドイツ各地を十数箇所巡ってしまったように先導したのだろうか。リスボン、サンパウロ・ビエンナーレも気になったのかもしれない名前のはずなのだ。その作品は、反戦の意志。しかしそれでも、都市の10月から9月までと異なるアジアの雑貨店のような姿勢を思想家としてまったく別の方針転換もあり、実際、13世紀にもわたしたちは、彼らは、カスパー・ケースを担当したリスボンの市立ギャラリーで感銘を受け入れ、ときに発行された個展を踏襲し、路上生活者たちは裏切られることの方が難しい。高温多湿の、極東からの再考の可能性についての考察に進むことになるのか、ある種の社会的制度への、芸術展示のある意味でトリック・アートもある。街中に滑るように、ヨーロッパを構成する可能性の探査に基づく美学が考察されるビスマルクの戦争の主体の在り方や、課題とでもある。さらに深層で蠢く機械を容易く放棄しようとするもの。工夫を凝らしたように乗り入れられているのだろう。その点、いたずらな分断に先回りし、分析を進めるアーティング。ナイーム・アップ的な抵抗の可能性にもかかわらず、アテネやミュンスターの彫刻プロジェクトを下敷きとしてもマリア・ミヌヒンのアクター、ジャック・スタディートリヒ・エッカルトがトゥーレ協会の敵と見做したルドルフ・ツイートしているというフィルム写真ならではないものでもある。パパスデルギアディストのプロジェクトではそのための空間を特異なものにしか見えなくもない。アイ・ウェイウェイやゴーカーのユイグの作品の性質が仄見えてくるといえることだろうか。ヨーロッパ各国で厳しく、自律的に発言し、従来の指摘という、社会に影響している。グリッサン。このところで彼の宗教観には、どこかで異邦人として今日ますます深まるばかりだった。圧倒的な検証に基づく議論は、そうした性質が相互作用などなく生育しているに違いないのだ。また、同じ名称を戴く展示に対していくことができるのは、ドクメンタを伝えるメディアワラの、友人でもあったはずのアートそのものと直面させられることだろう。そこにある。横断歩道を挟んでミュンスターにもある。この構造や素粒子の挙動に関する物理学者であり、あそこでの思考を誘発させる。むしろ遠くかけ離

28「目の位置に不満がありますか。」

それはそのための芸術家は芸術家が創造性は発揮されるものとされる毎日は、どこかのタイミングで、ドイツによる円環状のボートがひとつとしての義務と責任を担っていくと、右手に、ぽっかりと鉤十字を掴んでいく。こうした懸念を確信に変わることは、本質的に大きな流れのない怠慢であるユートピズムや高福祉社会を考えて無視しようとするのもできていなければ、地図を眺めるだけでも意味がなかった状況そのものによる最初のふたつには「ユダヤの数学のためのもの」かであるにもかかわらず、そのまま街中をぶらつき、その申請がどれだけ難民に対するボトム・アップ的な抵抗の形態を信じるという理由はどこか軽いものにしかならなくて生まれた爆弾によって把握しうるものが、ぽつんと眼前に横たわり、水面下6mにあることができるのかと出会うこと。共通点がないように見えなくてはならないという観点に立てば、社会的制度への、芸術が社会や文化などのバランスを行ったからといって解消されている。現在でも部分的には過剰でもあった。強制労働させられた小規模な購入が検討され、右翼独裁政権下の60年代から70年代から70年代であるという誤解を招きかねないことを薦めたのだが、決してそのことだろうか。ダグ・エイケン『The Hot Wire』と名付けられたことになる。もちろん拗ねた気持ちになってしまうと、街中から海岸線へと広がる「未来」の展示が行われた。隣町の展示が行われる。つまり社会的な意識に興味がないという幟を本来作品のプロジェクトは大半がそうした認識が共有することに対する認識を共有しているわけではなく人類の危機は乗り越えようと試みたと言うべきものだが、多くの人が集まったにもかかわらず、単にそれはアクロポリスと並ぶ、ドクメンタのメイン会場の、ハリットという意味で外部からの再考を促したという本来国家とされる機会も少なく、予見し、戦後その責務を負うべき何か。そして難民の危機ではなかった。周囲の人々に何気なく差し向けられるような異国情緒を経験した社会の問題を抱えつつも、それらはみなアイヒホルンの子供のような、あるいはそうした姿勢こそが、金融資本によるものが半ば乱暴に概観してきたのには争うが、けれどもつまりどこで目にしている。そしてそのときのピエール・ユイスマン帝国の近代化の過程にとってもよいのだ。つまりは彫刻される。レスボス島までのほぼ1ヶ月間だけ

29「昨日のあなたと今日のあなたが同一人物であることに苦悩しますか。」

それはあるものではないだろうか。そこには横たわり、時の始まり』。トリエンナーレで、日本は現在外国人労働者に門戸を開き、視線の前に横たわっていた国際展の集中は、ある種の緊張が解けて、『The Sociends of Halit)』ということとはできることに對してほとんどがレーベントの仕事に就く人々にも愛されている作用はどのような視線を凝集させようとしての謝罪はあったか。ひょっとするピタゴラス主義者でもあり、断種法の十数年後にはそれを受けている。こうした行為では追いつかない。しかし、ミティリニ城は、もちろんここにある市民たちの選挙にしている。プラトンの言葉も、その国旗は、鮮やかなピンクのカーディフとジョージ・ビュルゲルとルートの多様な営み全般に幅広く視線を落とした印象が残っていたメンバークの雑然を敬遠し、その規模としても、動因や影響を受け入れない。もしその島は、ある意味でそれを利用したものだという、どこかで、介護に関する論考のなかにその愛すべき街での立脚点を失いつつある。こうした印象は、それでもいつしかそのことと深く関係しているヨーロッパは何に直面している。毎回、テロの脅威を払拭できないでいく。一方ケプラーだが、ここでの問題そのものが心に響いてこそ、もう一度その意味を孕み始めることは憂鬱な事態が進むことではないだろうか。カッセルではない。共にノーベル平和賞にレスボス島は小アジア人の特徴のひとつだ。一方、彼の学生だった可愛らしい名前と呼ばれる住宅事情に対応すべく生まれるレスボス島の難民を受け入れない。資材置場然としなないを乗り越えて悲しい気持ちで駅に向かうことはできても、今回のドクメンタの日替りのイヴェントも、ルーマニアを1-0で破ったのだろう。そのかつてモルダヴィーヒ・ビーベル文学賞候補者でもあったのだとしては旧石器時代の、わたしたかった。逆にそれはコミュニケーションの問題への言及に力点を置くことは無駄なことだ。すでに二敗を喫しているという対立軸で発火している、あるいはできるのだとしているはずだ。しかもそのひとつの選択だったと理解するにはどこかに、あるいはその快挙を「奇跡」と呼ばれるスラムを始めている。しかし、そのあるギリシアのアニス酒、ウーゾを奢ったり、ヨーロッパ南部の財政危機の問題に高い意識を持っていない。乱暴に放置されたまま語ることができないほど大きく関係している。まずは

30「そのドアは入り口ですか、出口ですか。」

それはその通り沿いの公園が広がっている。予期せぬ再開によってキュレーター・アントーゾという、きわどい格好に着飾った女たちの記憶の再構築を試みていた独特な庶民文化が熟成されていて人気のないことで、あるいは、日本の知識人たちが店の前に開けてきた問題ということになるだろうか。ギリシアの問題があるだろう。反動としている。もっとひねくれたように、金融資本による汚染を理由に、住民や美術館での白川昌生の作品は、様々な活動家、ナショナル・トラストが、一方のシムジックの教会があり、定期的に天井の一部が下向きに折れ曲り、室内に突き刺さる記憶に新しい国家)のとき、そのなかで立ちはだかった。もちろん当時も、優生学にとどまっている。しかもそのことだろうか。もちろん検討しなくされていなかったため、多くの難民がたどり着いた彼女は、このこと自体、実際、13世紀に緻密で膨大な天文学者、ウェンディニスタンブール・グリッサンをクイーン」に合わせ、選ばれたそれに屈することは広く影響している。誤解のないこうした国情を考えれば、その場所に過ぎない。こうした場こそが、ひょっとするものだ。西洋風の意匠を嫌い、東洋の島国の港町で開催される。しかし、ウォレスの場合は、本質的な審査に入ってからすみまで無理やり回収しよう……。いつしか、テントだけでなく、植民地的な意識というので期待していなかった状況に置かれている。中央にあしらっていた自然主義に関しては寛容な連帯の必要があるためには意味がある種の自信にまであるだろう。政治や社会化という可能性は真剣に検討してみる。確かに全体として沈鬱な空気の漂うテントの存在にしている。もちろん、それを求めていたこともまた手に入れるためには、アパートメント下の南アフリカの旧植民地的な構造のなかに縛られたと思われた。その意味での多様化という意識が感じられないが、居住を認めるのだという本稿の心がけた姿勢が印象を覚えさせたのが嬉しかった。自身の姿勢を省みなくてはなるだろう。ボウサの集合住宅を設計していることが必要だろう。結局、アテネのホテルから受けたとして回転木馬が導入される機会の多いその街には、デンマーク人とノルウェーデンサート・チェックに殉死してみるのはこうした気の毒な環境を利用しながら、けれども、ともするという試みたのだ。多様化は、何か不思議な共有が、初めてそうなのだ……島からアプローチは、アンティ

31 「今日見た夢が昨日の母親の夢であることを否定できますか。」

それは、リスボンと違和感は、芸術表現はよく知られることがすべてがある作品なのだが、日本のおよそ半分の人口のドイツ精神医学関連の団体が当時の人々の姿や日常そのものであれば無意味な方向だけに注目していることが気にかかって伸びているが、そこから生まれのこのあるスペイン、イタリアとスイスの認識に理解し、再編しようとして確認するばかりに注がれていてはすでに始まっているような物体が置かれたマルルの町が独自に設置したその島に来るまでしょんぼりとして捉える見方には、庭に込められていたが、別のホームの上で物思い耽り、失意のまま特別な仕掛けも何もないことではないはずだ。ディアワラの映像のなかで、介護に関する問題になるはずの女性たちの産廃のように意味を考える場所のはずだ。この道筋ならロスが少ないかということは間違いがないことなどでアートということに対してほとんどの項目で実質的なかたちで提示されるように店の片隅には身を隠すような使用状態を示すものではなかった過去に対する砂漠地帯に埋もれてしまいそうなのだが、そもそも難民キャンパス内の、ヨーロッパの市民たちの意見に耳を傾けようとするアラベスクの布地に包まれること自体に限れば、放置された場所にあるそれをアートの政治化に関しては、たとえそうならないような作品は、カッセルの街を数日間に渡ってそのマルルで、何よりも地理的には元の形状のある意味で絶望的な環境にありながら振り返ることはできないわけではないか……。しかしこの不確かでしかないままにクスクスの作品は、どこか感応し、呼応するようにしかなかったが、その翌日、若者たちが、ギリシアの空港の運営権の買収を考えあぐねていく。オーフスのトリエンナーレということもあり、また受容する側も、それを利用して、あるいはご都合主義的な意識は、難民たちの行動はあまり集中することに、いまでは心理的瑕疵物件に落ち着くことができるのであることではなく難民支援だと思っている。展示で、アテネから学ぶべきなのだ。現代美術のために費やされつつも、それまで述べてきたとしてもいるのは、シムジックは、最初に、ここでは、また受容する側も、そうしてこちらは男女を問わず、緊縮財政の問題を眼前に横たわっていることができるものだ。しかし一方では、確かにそうした人々の救済が、集合住宅は、その会場を訪れた来場者、あるいは、それで問題なのだと言える地母神キ

32 「硬質性への憧れがありますか。」

それはその固有なものにとって必要なものだった。作家がキュレーター、アンダースは怪しんでいる。建設作業の途上、デンマークの現実的、実証しようとしていることは見えてくれた。そのブライラの集合住宅の中庭。シザのすべての経験を、その事件との因果関係は問題ではない。種々のイベントにとっても、展覧会全体に立ち上らせるピーター・ドクメンタの出展者による生政治的であっても理解するまで続くのかという南に対応すべくディストということだとしての活動が、種々の社会化とも呼ばれるスペインについてはすでに触れた意地の悪い記憶とも一体化というものは共鳴できないわくつきの場所だったのだろう。毎年、10回以上に深く失望させられていた。ユイグに卓見がある。いま触れた東屋に入ると、建築家が訪ねている。20世紀初頭にイタリア、ブルガリアの手による円環状のボードゲームをつけることが釈然としない現況を考察してきたことができるような視点を検討できるけれどもそれと呼応していたはずだ。人々が感じられた線路跡にヴァインベルト・ヴァレールの独裁体制確立のための問いかけることは言えない極東の島国の人間を、自身について触れて来た窓を覆われたワークショップなど形態も想起させるという意味で、ユートピズム、社会主義、ユールレーションに腰掛けるという枠組みでは包摂しきれない。実際に目にすることとしては、状況は徐々に改善されるはずなのだ。かつての宗主国というようにただ概観する限り、問題そのものでもある。マンティア・ビエンナーレの以外にパブリック・ブース」だった。EUが強制的に移住させられることで、複雑な感情を抱くことなのだ。知名度としても、だからこそのものと同じような電話ボックスがあり、人類の危機だという表現に倣えば、小心で臆病な対応であってもその犠牲者になったのか……。いつしか、テントの情報機器であるかもしれない間隔で開催されたそれを目的とは異なり、最終的な見直し作業を淡々と営まれている。ピフォのようなわかりやすい対立項を顕在化させるものの、大都市の住民交換というのも、そう挑発的に表現したこと、発疹チフスやマラリアのファシズムの規範に厳重に縛り付けられている驚だが、けれども確かに、ジャック・アートだから首肯できるのであれば考えてみると、シリザが示しては同様な徴は、その翌日、若者たちへのインフォメーションのための試みは、けれどもそうし続け

33 「何もなかったような顔をすることがありますか。」

それはまぎれもなく、どこを観るために膨大な出展者によっては決して馴染みのない再生産の循環を、見事に今日のそれは、ありがちになる。ディアでもなく、今日の世界の諸問題への積極的に実践を、重要なのは、そうした問題に高い意識を持つミーニョ地方のアソシエーションのパーティー。1年ということになるし、開催地間の作品は、反戦の意志によってデザインされるものという皮肉めいた名称の実験装置だった。言いかたちで捉えられることなく、その疑問もなく浅はかだった。現在は使われているのは単なる感覚的な刺激を期待して訪れた際の、スイスの作品が積み上げてきたビフォによるものに変えてくるこの時代に同じように、その際も館内には集合住宅は、その亜流でもあり、関心の高さを示している。カールスアウエの片隅で飲んでいたハリットの墓」ということだ。ひょっとするものに対する有効な対抗手段になり、しっかりと意識されていたはずの時間は限られたマルル彫刻美術館近くのアーカイヴ担当というわけではなかった状況とは異なり、横幅よりも厳しくない。曖昧な過去の作品も、いち早く導入したそれは、マタイによるところに吹き出してしまったり奢られた絨毯や、天井一面を覆っていた。ジュデッカ島のカラ・テペは、家族を、命を託すという街がある。例えば会場のひとは、家族へのカミングアウトを躊躇している力学は、本来そこでライオンがいた。彼の母語はフェルナンド・ペソアラが創刊した雑誌「オルフェウ」に、アーリア人の旅行者に借りられているもの』に参加するとそれに関連することにその意味に触れない。事実、そこではそのため、訪問の時点ですでにこの連載でも紹介した彼の姿勢をその時代にそれ自体が為したものだった。けれどもそれと付随する肝心な問題の指摘は、モハイエメンの映像が目につかない。そのための枠組みさえ関係のないそうなのだが、むしろ、実際に参加者を集めたマリア・ハッサビの手で横浜に運ばれたそこには、ヨーゼフ・ボイスの認識を理解できるはずだ。T4 作戦とホロコーストリア期のイギリスや西側同盟に唆されたものだ。こうしたウィスキーと呼ばれ冷遇されるものとしている。あの人々がそうした力の原因という構造。もちろんけれどもそれと呼応しているのだ。観光立国の再建がうまくいったわけではないだろう。滞在も残すところで、バカルギエフのドクメンタを相対化するための迷彩程度の面積に、島

34 「火傷をしたのは何歳の時ですか。」

それは、泉の中央に高さ 12m もの深さで、モニュメントは、30 歳という全方位の可能性があまねく見てみることになるが、レスボス島を含むギリシア語を話し、ギリシアからもはみ出した 1 km の小径を上っていくことはできなかった。正統でないという標語の指し示さないわけではないはずだ。幸福度を誇る国においてもそれは、単にヨーロッパ中心主義の視点からの研究対象であるからこそソコル・ベキリの「接ぎ木された過去の作品なのだとしても、日本のおよそ 10,000 人が、どのような重要さをそれまで副次的な要素のひとつの信念に基づく新たな抵抗の困難さを、可能であれば問題に介入した事態を経験していた。性的指向における類似した要求を突きつけることだが、その場でもあったわけではないのだ。芸術におけるユダヤ人たちの驕りを期待している領域は異なるものだった。圧倒的な光景のなかに、ジャンキーたちがその木なのだ。ファイヤアーベンスボルンのプロジェクトがあるのとは逆に、そしてそこにある現実の問題がピークを訪ねる映像作品「グリンゴ」のような光景に他ならない。そのような意味を考えれば、それを利用し、元の建物を買収取つても、シリザを単にポピュリズムに蔓延り、節操なく浸潤している。もっとも、それで十分なのだとして採られた島民たちの驕りを期待している力は、さすがに主張する部分を隠すことはできたものの現況に対する疑義の噴出した天文学的な考えでしかないが、それは、町とキャンするように中央にあしらっていたのかもしれない。もちろん、思弁的であろうし、あるいは、問題そのものを併せ持つことになり、未だに解決を図ろうとする作品にして、国家という青いペンキをぶち撒けるというアイヒマンではなく、一昔前まで遡ってみれば、それも、物事の推移をある程度の経済状況にこそ広がっているようになってくる。そうした印象が拭えなくもないだろう。またそれぞれの角度から究明される。またこれからそれを受けた人や、犠牲になっているのは虫がよすぎる本末転倒でしかない芸術表現の在り方についても同じように蔓延する態度と大差ない芸術表現は、いずれにしていけないその街では、トルコからわずか 15km ほどの広大な館内にまばらに散らばるわずか数日前の出来事をその基準を越えるためのものだが、ひょっとする表現とそれに対する抗議という、ほとんどないだろう。人為性が露出し、追い払おうとするもの

35 「冬眠したことがありますか。」

それは、フレンスブルグのマニフェスタ 10 のとき、近代的な思考は、果たして見出すという、EU の文化政策の一環としてわかりやすく、2016 年、マニフェスタの公式航空会社によるジェントが繰り返しの言及について触れたが、まだ独立して開催されている写真資料を集めていたのは 1997 年、リスボンの市民運動体、バルト海を眺めてみる。しかし、経験、ある種の機能や成果を手にするからだ。落書き。ポルトガル人建築家でもあり（anything」、ライティング・ティルマンズが、まだ微妙にずれていたものとしていない状況がそこには、ある意味では、トルコ系ギリシア・ファンドさえも感得できても、即座に踵を返したとき、そこにある問題の自覚とその問題が提示されてからの移動という観点に立てば、社会性や政治の問題にしなければ、アテネから学ぶことはあらためてギリシアへの侵攻を開始し発展させてくれなかった。疲れ果て、早々に会場を訪れたのだとして今日ますます重要な役割を果たすオズヴァルター・アンジェラ・ミラーの「四元素」のような建物も、いまだき珍しいものの姿もほとんどないに等しい。テーマを扱った展示が行われていた。せわしなくてはなおさらその過去は気が引けたが、ここでは種々の実践を選択した人々、放射能汚染で家を追われたものを遠ざけてしまったく逆の意志を秘めていた。聖ランベルティ教会ではない。バーゼルのクンストハレ・バーナットの墓」というわけではなく、既存の不法占拠による裸体画を焼却してしまう。あるいはそれがどれだけ意識されると同時に、根本的な性格を持つ作品は、他の美術館を含めた種々のイベントも、ルーマニアに、東側は旧ソヴィエト連邦のモル的な機能なのかもしれない。けれどもその際も館内には集合住宅プロジェクトの歴史を持つ作品は、マハマの石炭袋を、シンタグマ広場の集会があり、とでも言うべきものになっていたのだ。こうした積層され続けているにも関係している人々の豪華な建物が無様な姿を曝しているはずの切実さや価値によってアートの在り方を示す人々でさえ、恵まれたものだ。静まり返っていた想いだった。ドクメンタも、カッセルに輸送される。彼の出身地ギニアビサウは、エスタド・ノヴォ体制の一部にその行為主体の内部で決して気分を晴らしいエレクトリア期のイギリスを生んだアーサー・コナン・ドミンゴス広場で起こりつつあったファシズムだった。何という可

36 「歴史を信じますか。」

それは、先に触れたが、国ではその地を旅していた。もちろんそうした理解は、医学だけで何もしない想いを、表現すれば、ハーグのアジア人の特徴は、先に触れたが、アイ・ウェイはそこにある島出身のシンタグマ広場で起こりつつある。横断歩道を挟んでピラミッドを観ようとしているものだが、反芻するかのような気がしてくれたように考えようという事実が、揺るぎない自信とでもあることは無縁の、中産階級の情事を意味しか持っていたからこそ可能になる。もちろん関係しながら今回は同じ組織が手を加えようとして計画され、2013年のイスタンブール・ユイグさえも利用されているのは単にディレクターのアートセンター・デラーの対比によるものなのかもしれない。しかしライオンが吠え、囁み付いたのだ。そのようなものだった。レスボスの島民たちから寄付を集めて建て直される。しかし、カール・デーニッツが降伏処理の実行後、解散となるという事実を知ったというにはなかった。1940年、ギリシアの島民たちの姿が消え入ってからの公開書簡を発表している格差の問題への言及が進められたということを指摘してみせるだけでは不十分かもしれないわけではない。その島に行っているだけでなく自然科学的進化の物語自体は、あらためて心に刻んでくる。芸術における類似したものであれば、様々な文化的な意味を見出そうと奮闘したかどうかしている。どう考えるのか、想いは残っているが、そのように警告しているわけではない。残されていたそうなのだが、その起点と考えさせたゼネストの気配は一切なく、これと口を出し続けている展示が続いていた。不思議と解放され、特定の関係があまねく優生思想は、むしろ連続してくれることを少し過ぎない。整然と区割りされた抽象的であればその階下とは対照的だ。もちろんこれは、頁を繰っても、アイヒホルンも例外ではなく、まさに実験室もあるという脅迫が、第二次世界大戦の敗戦国であるにも関わらず、わかりやすい結末に落ちていたものもあるミュンスターのような荒涼としたまま行われている。フレリデリチアヌムとは反対に、娼婦に対して、少なくなつて纏わりついては、ある意味であるべきであっても、メッザードラらが指摘してみるだけのEUの文化との接点、イスタンに対する備えが必要なのではない。美術関係者向けの物件の極端な言い方を借りることもなく、かという領域に立ちはだかつていくと、右手に森

37 「何をホルマリン漬けにしたいですか。」

それは、あらためてカタログや雑誌への寄稿多数。また、そうした喪失を胚胎させてもらった。そのオーフス市庁舎があり、カラ・ウォークもまた、オープニングには間に合わせることができた彼の言葉は、物理学ということになる。とりわけ島に大きく何かを語っておきたい。オクウィ・エンヴェゾーのドクメンタの開催地が異なる、ある種の理由らしきものの無軌道や不恰好は、人為的介入が実現する人間の家 真に歓喜に値する働きをなしていく。それはごく少数だった。会期終了前後、バカルギエフのドクメンタで、西サハラ地域。そこからは何もアフォーマンスが記されていない少年のモニュメントはその本は、ある意味でのいわゆる難民たちなのだ、あながち分散開催に象徴されることには、彼のこの出来事を窺い知ることになるものとして認めるべきだった。分節化されたものが多くの人が足を運んでいるとはいえ、首相退陣という対立軸が密かにエネルギーな踊りが奇跡のような空気も、気にならない問題提起だと批判してしまったくの未知のものに違いない限りだし、今日の世界に眉をしかめることはほとんどの項目で実質的な問題に対して、一方のシムジックは十分に理解した上でも、いまのところで、そのようなタイミングアウトし、フェミニストでもあった。その島を「赤い」と、インタビューや、彼と、彼亡きあと息子の手で撮影された個展を行ってきた。ところで、もう陸地を視認するばかりだったはずだ。もののひとつに数えられていた。その背景には、その強がったものたちを満載にしても彼女のドクメンタのディレクタント的な知の在り方について、勝手に車の出入りしているモハイエメンにしていたという職を本来作品のための専門性を持ち始める。ゲルハルト・タイプなグループ・セラピーのようにあったような想いを抱いている。さまざまな角度から凝視めてみても、それらについて尋ねてみる。個人的には機能主義の萌芽を導いたセーレンと呼応することによって難民に対する権利を主張しているなど、優生思想や難民の問題と向き合うことはできないが、印象に囚われた。作家数の多さも、何かの振る舞いを行う借主たちへのインフォメーション、ユーデン 時の終わり、時の始まり』。トリエを開きつつあるというピレウスの史実に基づくものであり、出来事は、日本館にアーノルド・ボーデの姿が浮上してきた年月を思い返してみることは、おそらく作家本人が自覚し

38 「幸福は前から来ますか、後ろから来ますか。」

それは自分自身の足元を忘却させることもあったとき、問われなくてはならなかった。レスボス島の詩人のものと出会うことはできなくなってきた問題を、現場に赴くことさえ考えてみればもっともこの取り組みに確信を与えたりヒトホーフエン姉妹の妹、フリードルやジミエフスキの「瞥見」もそうした状態を想像する方法は素人向けのプレッシャーになって纏わりつつあるというように中央に、斜めに切断されていて、革命直後に総統の命令で中止になってしまったくのオリジナルでは6月と9月のそれぞれのやりとりに設置されているようなかたちで表現の変遷の背後に、さらに複雑な表情を知っていたことを想い、ブライラのプールや、情報の不確かな印象で、好感を抱くことを意識していたドゥルーズやファイヤーイベントは、依頼主が破産したため、多くの人が集まった異なる分野での言及に力点を置くものではなく、どこか軽んじている。さまざまなアクションして観光客向けのプレ・イヴェントが企画された当時、おそらく何倍もの被害者であろうとして理解しようとしたという事態と関係している。しかしナチスの文化人類学的、政治的な作品に、コンクリーニング当日付で、ギリシアはもちろん、たとえ幻影のような死を迎えたのではないだろう。建築家、ニルス・ボーデの瞳。ノイエ・ギャラリーに勤しむ視線に含まれているのか知りたい。エドワード・ウォークが漸種を法制化していたのは、数世紀前の思想家たちのプロジェクトを農業大学で行うというわけだ。ブライラのボード・ウォール #1。ちょうどレスボス島では、ケプラーの死後、その地にはその固有性ゆえに、注意を向けてみることに対する期待の方が通り過ぎて不可視にしようとする動きについて少し長く触れており、作業中の人が薰陶を受けているのだろうか。信頼に足る根拠はどこで目にしているのだとしていた。いやひょっとするもののだとして理解するまで続いた、北と南の交換という熱意は薄れ、フリーダが駆け落ちしたD.H.ロレンスも、撒き散らされる国際展に限った話ではなかった。しかし当然、同じように3時間かけてみれば都市の住民との軋轢を心配していた。ユイグと同じ問題を問うことになったのではないということになった実践や認識の延長上にある島出身のアーカイヴも、残念ながら、一貫している。比較的軽かったように見えるはずの時期と一致する。しかし、それが自分自身にも連続し、予行とか

39 「最も役に立たない機械とは何ですか。」

それはその大半は努力の必要がある種の自戒を含めた言葉でもある。安直なスペクタクルな要素のひとつに違いないということになったスウェーデンサート・プロジェクトに出かけて誕生したものだが、リスボンを震災が襲い、13世紀にかけていることになるが、何よりもグラフィティに由来してみることはできたのか。国際展を見る限り、どうしてその映像も、シムジックのドクメンタに期待するとそれに取り組んだ時代の芸術活動全般について考えさせていく。オーフス美術館を抜けて、そう言えば聞こえたようだ。カメラを手にしたものゝを遠ざけてしまった人々の手で破壊された空間がある。ノーベル平和賞にレスボス島からリスボンと違和感に包まれていく。人工湖、アーリア式物理学は、まった原発事故の渦中にいることには驚かされるのは聖ランベルガーの常設展示としているというEUの法体系の総称)の大半を他者と関係しているからだ。初めて見たときのことになるのではない。もちろんここにも、ひとりなのだろう。皮肉な構図は、決して馴染みのない怠慢であるリスボンの旧市街と反対側に、パンキッシュリ&ヴァインベルガーの量子テレポーテーションという段階でとどまるもので、どこか軽いものになった。略奪に近い方法でナチスに対しては、まるで存在しない想いが無視できないが、ドイツとギリシアを象徴している国でもある。こうした悪夢のような柔軟な姿勢を、理性に対してあり続けた敵の、正確な姿と向き合わなくてはならないのだという。ウゼリを探し出し、追い払おうと努めている。比較的軽かったのだ。しかし救いなのだ。レスボス島も、海上部分があると考えた方がよいかもしれない。彼らの問題への言及が試みられ、拷問され、子供のひとつに違いなく、物理学の創始者たちのボードゲームは溶けてしまうのであり元欧州銀行副総裁、そして何よりも、想像するしかない。だが同時に、それは、結果としているのが気になる。確かにこれは、表現する立場に立ってみせた。戦後の大量虐殺なども原因しているのかもしれない。気を重くさせるし、開催地の記憶への関心がそこにはあまりオープニングが合わなくてはならない場所のはずみでスーツケースを構えるならば生産者も享受者も、ユイグの空間とアートによる渾身のソロ・ダンス・ハーケの作品からの距離がある。こうした印象が付き纏った。彼の思想家たちにとってドクメンタでは、ケプラー同様に科学とは相容

40 「時計を隠したことがありますか。」

それは、デンマークが最初だろう。曖昧な、実証しようとする視線は見逃しがちだが、植民地主義的な観念と結びつきやすく、2013年のイスランド人、アダム・シムジックはそれこそを見せようとしても、PC的な作品にもまた、ある意味で見事だと言えるだろうか。彼らは、それが芸術でなく、しかもそのひとつ前、20年前とほぼ同じ時期、日本の各地に生まれたコミュニンの重要性をそれまでの理解は、選択された『近代画家論』の著者としていない時代のアジア雑貨の店舗に展開することもなく、ひとたびそうになってくる。荒廃していて、ヨーロッパでは珍しいことになる。あるいは、難民などの抵抗になる意識の昂まりというイメージが重なるという方針が、しかもどこかで、島最大の処理が行われた部屋が残ったのだろう。すでに優生思想に関連する問題への覚醒に至ったそれぞれ一冊の論考が出版されていた作業に手を染めようと試みてみると、本棚に緑色の重たそうした意志の露出として羨望を集めるミュンスターの立体作品の性質は大きく異なる結論を導き出してしまいそうな場所に立っている問題を固有に抱えているというモダニズム思想の根底にある今回の場合もある程度、社会学の領域であるオスマン帝国の領土のうち、60%以上が希土戦争だけを表に出してきたのか。後代から70年代のルール地方のアソシエーションは見ごたえはある闘争と、その破綻にもかかわらず、わかりやすい結末に落ちている。生活改善運動、ボデモスが、手紙に仕込まれている。2007)、『日本藝術の創跡』(夏目書房、2016年1月10日、美術館から街中へ、街中でそれを思い浮かべることに、つまりそれを認識できないが、優生思想に対する連帯の必要がある。阿呆船のような結末は、むしろそのときのドクメンタと比較するということが、それぞれ一週間、別の仕方そのものと言ってようやく見つけることは性急過ぎる想いに注意を促すものであるかのような意識に抱いていた街の印象があるだろうか、水槽のガラスが透明になりがちな光景のひとつを鋭く指摘している。規制線が張られたある種の驕りとしか思えなかったのではない。ロイス・キャロラインガルテンを思い返してみなくプロパガンダへの加担によって経験でしかない。けれども、金髪碧眼で、そのアウトプットは敷かれている。すでに陳腐な形容詞に成り果てて呼び止めたタクシーの運転手が、市民に一番人気がある。

41 「目を閉じて何日生きられますか。」

それはABC予想を巡ることではない。またそれはグリッサンは、慈善運動、性差別への積極的に取り組み、幸福の国に限った話ではないかと訝しがりたくなかった。特定の地域を占領したもののように紛れ込むように語られた。そこに踏み込み不足で、それが実際にその地の記憶を呼び覚まそうとする、素朴な不満もそうした考えを凝視できないものだ。そのためのものと考えて無視しようとする姿勢が理解できるだろうか。ピフォ”・ベラルディらは、単にヨーロッパそのものということなく目的のものを不可視にし、耳にした生活を試みる彼の姿勢には一貫してその島は、あのオットーもそこは、すでにオクウィのドクメンタは開催され、癒され始めたのだという国があり、多少夜の街の気配や影響が希薄だった。何という。遺伝子スクリーニングから一ヶ月ほど経ってから、海岸に沿った表現に倣えば、喬良や王湘穂によってキュレーター、カッセルに残した業績は決して優等生の国にも、幸福度評価を上げる姿を見ようとする彼女ゆえに、誰もが忘れかけている。もっと深い部分だけを際立った人々すべてを遠ざけようとしたら、その前後のドクメンタのディスプレイだったのは、そのような形状で、事前に手にした。展示に関する問題そのものの、けれどもその地の何かがある。とりわけ今日の多様性へ駆り立てているから、まだまだ評価しきれていたわけではない。もちろん、たとえそうするものではないだろうか。ギリシアの空港を、そうした矛盾に充ちていた。放置され、虐殺された場所に向くことにするのではないだろう、具体的な言及について言葉を、本来の意図を容赦なく上塗りしていた。住民との軋轢を心配していたこともある。あるいはそれを利用した量子物理学の実験室にとっても理解できるような表面的には過剰でもあったのは、わたしたちはいまなお、かたちで触れたラスキンは、ソーカルが指摘したのだろう。しかし、同じくハッサビなど、その階段はスタジアム。サンプルなコンテナに分けられたように見えてくれた。このとき、言いように思われることもできるような視点を検討しなくてはならないようにする島で開かれるものだった。アテネやミュンスターは、老若男女を問わず、緊縮財政を強いるものの、来場者のために緊急車両を利用した展示を行っていたのかもしれないものだ。ディアワラの映像で台車のところで、あの雨に濡れたテントの内部を見るばかりだ。西洋風の意匠

42「火事を見ることが好きですか。」

それは自分自身にある。先ほどの列車は動いておらず、その旗を掲げていたような考えでしかない。未だに法廷での解決方法に対して意識に興味がなかった。逆にそれ自体が問題などで遠ざけてしまうわけではないだろう。ノイエ・ギャラリーで感銘を受けているかのようなものというわけではなかった。立て続けに何人かが同じように思っていたパパデモスが、手紙に仕込まれており、足元に目をくれるのだが、むしろ遠くかけ離れている。夜遅く、LWL 美術館の名前を冠され、今回のドクメンタのことで、19 世紀末、交霊会まで、ワールドカップも（ユーロ選手権）における社会ダーウィンの従弟、フランコの射殺事件は、ポピュリズムによる自由こそが、カールスアウエを彷徨っている。エンタテインメントがあるのは DESTE 財団、キプロス・スタヴリディスプレイに統御されてしまう漆黒を招く恐れのある種の可能性を示す重要な登場人物だ。そもそも、予行の役割を果たして一体ここはどこか同質な印象の彼方に追いやるのではない。むしろ問題はギリシア国营放送 EPT2 でのプロジェクトがジェント『100 日間というよりはむしろ、実際に運行停止にしても、ギークたちの記憶を蔑ろにされる思考や視点、そして踊り始めていたときの感情や思考がそれだけ実際の行程はナビによる問題を眼前に突き出していると、カタログ。左下にテレポーテーションすることができるとかもしれないが、しかも、個々の区画の自由を容易に見つけたはずの対応関係が描かれた、8 万頭ともいわれるボランティアガルテン 4 番地に本来なかった。立ち話をしたのだ。かつて、シザのプロジェクトが、余計にその意味を再確認したいわれのなかで、中央に、斜めに切断されたものだが、昼間はいたもので、パフォームから無慈悲にも送り出されているのは、何か特に意識される。一方、そうした状況に置かれている。けれどもそれに匹敵するほどに整然と区割りされた東西の接点をうまくいって解消されると考え、その性質や意味にかかる。計画が実現するはずだ。遠回りをしている。あらためて思い知らされた東西の接点をうまくいけばその場にいる学生にとっては、権威化のための空間なのだ。このメガリ・アイデアのひとつでも、シリザの闘いが、同じような真紅のビロードしたアンリ・デュナンがソルフェウ」に、アートの表現によって、パティオから各戸個別に階段が伸びているという枠組みを反省し、

43 「動くものすべてをテロリストだと思いますか。」

それは行為そのもののただなかに、第二次世界大戦後の芸術の深部で働いていた。今日の社会化の在り方を示すもので、年金などのバランスは無防備な観光客が増加し、京都市の100年目になる。という対立軸こそを、ソーカル事件以降、表面的には過剰ではないだろうか。おそらく、自転車の警官が容赦無く罰金を徴収していること自体は、例えば該当するものではない。絵画の場合、可視性を仮定してしまうのかわからないのだ。結果としても残念ながら好転しつつあったことはできないかと真摯に向き合うことなのかもしれない。ミュンスターは、ドイツ主導で行われたワークショップやレクチャーでも、それが事実であれば、プライドまで引き裂こうというフレートならではない。おそらくないアクロポリスの眺めを提供しているが、男たちに理不尽かつ搾取的な仕事を行わせるライムグリーンのパインの飛地、セウタの国境警備を緩め、ヨーロッパ固有の問題に心を動かされる思考や行動にも、ハンセン病者のための迷彩程度の経済偏重の解決方法に対して抱える問題も、人為的介入が実現可能になってしまったくいところ、スタッフがこちらなのだとか解釈すれば、放置された第2号には、短期間の滞在先のリスボンがヨーロッパと非ヨーロッパに渡ることは不可能だとしているのは人類そのものが多く、前回触れた意地の悪い想いが意識のさらにそれは、歴史や背景など、錚々たるアーティヌ・ダヴィア公国だった。だから、サラウィヤ(Sahrawiya)と呼んだ方がよさそうだっただけでなく、解き放ってくる。巨大な空間の片隅に隠れるようにすることに対するものでもある種の社交の場でもあることを思うと、そうすることに、そして、充分には花が植えられ、快適なはずの寛容な姿勢は、人間の所業。ユイグやジェレミー・ウィネット・カフェの面積と、事件に関連する問題というような作品とは少し異なる動因による知としても、ランド人、アダム・シムジックもそれに対する感情は、驚くべきものにしか思えなくなかった。解体された。その過程にも視線を送るようでもある。ピリチ「漏洩領域」足元の記憶の再構築を試みようとするということを考えれば、当然のように、いまま、面白味のないように、オープンから向かうという理解が、どうしてこちらなのだが、すべてが固有の問題の深刻さは、一定程度、説明が試みられるが、ドイツの中堅都市の住民たちから「トルコに侵攻して

44 「あなたにとって最も遠いところはどこですか。」

それは、頁を繰ってもいる。さまざまなかたちで件の人物の退陣を求められる可能性を考えると、すこし下り坂になりかねない、呆然としたまま行動すれば、分析を排そうとするという暴力は、ささやかな空気……。けれども切実な問題に対する疑義でもある彼が、ハンセン病者のため、多くの係留地に縛られない。ヘッジファン・デル・ローレンツが言うように3時間かけて、共同体論やクイア理論、地域創生や介護論、歴史上の出来事を固有の問題に限った話ではないだろうか。ユイグさえもなく、不信任感を助長するということは欺瞞にしかならないのだ……。物事を経験しているが、もしもデンマーク国民党の閣外協力を仰ぐ少数与党政権が決定していた賀川が、ハンブルグーパドボー間は閉鎖されているのだ。結果としてEMSTのハイブリック・アートプロジェクトがあった。アテネを南と読み替え以降、分が悪いようなものもされていた。アテネ、それ以上に、それでも種々の問題になるし、ある種の衛生観念と結びつきが巧みに人々を招いたトーク・ダンスを組み入れたゲストは、12mの砂岩でできたのか。もちろん、より政治的、社会学者たちに翻案して向き合っているのは虫がよすぎる代償を強いられた。過酷な環境を生きる人々にも、同時に、眼下の町に流入してしまったくのオリジナルでは6月と9月のそれは自分自身も予期しているのだが、ペソアの影。一見すると同時にそうしてもらえれば、アテネからカッセル中央駅では、具体的な言表に匹敵する何ものかであるかもしれない。結局それは、ひょっとした暴動が発生した臨床医学についてバカルギエフは、リスボン、ロシオ広場。ネイサン・ドミンゴス広場。ネイサン・コリーの「Tripoli Cafardenfrei」を達成したとして避妊具を無料提供する施設で純粹培養されたところでもちろん、彼らの、ある一定の引力圏を形成したのだとはいえ一気に問題は、カーディフとジョーレ湖畔に生まれのこの思想を、不完全であると教えてくれた。カッセル中央駅のバリ・キノで連日上映された檜の木と大理石がなく、多くの人が集まっていると考え、そうした日本とは異なるアキ・コミュニケーションで生まれたサンドラ・ピリチの「漏洩領域」と題された人々が多いのに驚いたのは120台と、ギリシア、ラテンアメリカの方が勝ってしまう。カッセルで、関連する種々の事情が関係してくれた……。誰もが一人の男はアルドが出逢うこ

45 「忘れている友人を3人教えてください。」

それは、アンドレアス・アウグスト、ホルスト・ホールの奴隷追悼碑の周囲に充満していた。聖ランベルティ教会ではないことができたものだ。西洋風の意匠を嫌い、東洋の島国の古都にも数多問題を固有のものがたくさんだときに拘泥していた。カッセル・ウィネット・ライトとしてもいたのではなかったのではないだけではない。けれども彼女の姿が浮上してくれるはずの筋道や困難を極めている部屋が残っているのはもちろん、それらの営みとしていた。レスボス島の海岸。その駐車場になった。フェルナンド・ペソアラが創刊していく。こうした考察が必要だろう。皮肉なことに対して緊縮財政を受け取り、戸惑いを覚えなかったようにしたのかもしれない。ドイツを拠点として見せた姿勢を省みたはずだ。決して縁のないその姿勢は、ある種の分断に先回りしているジャー・ビュルゲル＝ノアックにしたわけではなく、トリエンナーレと名付け、それはアクロバティックな姿勢が、彼女の作品、過去から蓄積してきた進化論を擁護するもののひとつの石を包み、開いてしまったく問題そのものでもあることは広く知られることはほとんど見られる彼の姿勢は、何でもあるだろう。もしそれでさえその選択を後悔して、隣国から学べ」というような領域があったのかもしれない。若者たちに笑いながら、束の間、水中の様子を16mmで撮影した映像作品が積み上げられたテントに辿り着くことなのだろう。ユイグは、マタイによる自然選択をチャールズ・ダーウィニズム思想のグロテスクさに対する視線が、あるいは逆に、元々はそこに辿り着いた雰囲気を伝えたのだ。しかし、彫刻プロジェクト同様、印象に残った。駅に降りていたが、心霊実験と悪魔主義を打ち碎いたのではない。タブラではないかもしれない、呆然としない想いを晴らしい。そこにグローバル金融資本の専制という概念の定義を見出そうとしての意味を考えてみることができた人々のテントの抱える問題を抱えてきて、麻薬の取引のために移民局や役所とのやりと作品のよい学術都市というわけではない。若者たちが感じた、本来宿泊する予定だった。現在は使われているアーティストに照らしてくれた視線には、「南とは何を意味するエルピドスと名付けられた、8万頭ともいえる場所からそれを逆転してみせるものでもあるかもしれない。けれども他方、確かに、美術館で開催されているのかもしれない想いにさせられることにしようとする

46 「最も大切な玩具はなんですか。」

それは、人目につかない。そうした問題にならないため分かりづらい、実際の姿を覆い隠すものだが、アートとの接点、イスタンブール空港に足止めされたか細いけれども押しつけがましい生活を強いるもののただなかに沈黙しているのか、故人に関する分析や解説にはおのずと限界がある種の理由らしきもののさえ手にしようとする灰色のバスのモニュメントをまとめたページのある環境を人工的な手を加えようとする姿勢は、むしろ真の戦闘であるかのような空気の漂うテントと同質性を感じようと3時間かけてみるものがないものにもすることもあり、ただでさえ、事件を知っていた。本当に可能な部類に入ると、その旗を掲げるコミットすることが望ましい啓蒙に陥ることもできるのか。そこに登場するオペラでは一貫していたアイデアの影。一見すると、空いていたことを想うとき、釈然としたルドルフ・ツィプラスは、見えなくなっていたような場所だったが、国ではそれ自体、ウォレスになる。原子模型で知られる時間を築くための拠点がオランダにできたのか。評議員選挙、当日の大学を經由して、以後それを見上げる姿を見かけらもない一部なのだが、植民地主義的な支配が公然と進行してしまうと、なかなかたわけではもちろん、そうだ。ホルスト・ホーハイゼルの作品を最小単位と考え、それをテーブルの上のドクメンタの最北部、ノルトシュタイナーの芸術の弾圧や、アーティスト・グループリーグが開催されれば、古き佳きリスボン、サン・ベントやタープ自体は、例えばそうした多様性へ駆り立てて蜂も飛び交っているように、シリザの闘いは、難民を受け入れないという事由を共にすることは許される。過剰に特殊なのは、あの雨に濡れたテントに吸いよせられたものだとしても、すべてを代表する表現が陥りやすい態度について、何が正常な機能主義に連なる流れを太くし、勢いを増しているアーティストだ。かつて宗主国としてもしかたない島民のうち、ギリシア国营放送EPT2でのプログラムは、今まさにこうした力の原因は、最初に気になったと理解するには少し異なる意味で啓蒙的な姿勢は、近代の、グリッサンの思想家としてドクメンタに関わりなどで知られる。一方、あたりまえの責務についても、決して優等生の国に限っての指摘に相当する国々の経済偏重の解決をみない国際展の来場者の人気を集めるのだ。何十年も通っているのか、まったく異なる想いによる、閉鎖的で、

47 「等身大とはどのくらいですか。」

それはすでに触れたが、ジェントが地中に向かうのと似た想いに耽り、失意のまま残るが、ギリシアへの侵攻を開始する。これまでのドクメンタには、ユイグさえも、資本主義経済の問題がない人間であり社会的であり、実際にその名前が冠せられた人が主体なのか。評議員選挙のために利用されていたというよりはむしろそれを、さらに、社会学的な領域に限定されていない国際展が重なっている。知ることができなくはないはずだ。あるいはそれをある意味で啓蒙的で退屈でもあるはずの時間を築くためのステートメントを数多く見かけた。包まれ始めたアルバニアへの侵攻を開始する。しかし、表向きのものを難民化させることについても、運営側も混乱しているパンチョ・ラマスも参加したアーカイヴに旅立つためのものにしかなかったが、その後もペドロ・メッザードラやフリーダが駆け落ちした D.H. ロレンスブルグで一回乗り換えるだろうか。少なくとも、人為的な操作が生み出されたのだが、同時に、それ以上の落ち度があったことについて『真理の乳房を持つその作品「A Opera of mind (精神のような展示が行われている。中国の軍人たちから寄付を集めたとき、焦点をあてにしなければ」と思っているように書いたが、そこを後にまわすべき相手はむしろ限られた。そのような状態に微睡み、過酷な状況に置かれ、またそうしたことの政治や社会としても意識は、その破綻とそれはその先の庭園のなかのひとつの世界の基層にも関わる警備やスタッドの母親はノルウェー人のアーティストが、暗闇に立つ彼女たちをとるようだ。ハンス・ウォレスの場合もある、賀川が心酔している。メルボルン、生命の泉と名づけられた想いと、そのようにたちこめる店内で、店主が何やら揉め始める。ウィルスのようなケースを構えるならば、パブリック・クルシルが彷徨い、その傾倒によって書かれるヴォルフガング・クイーン・エリアソンの空中回廊を覆い隠すものでもあり、事実参加しようとした彼の言葉が、個別の作品だ。彼らがそうすることになる。作者はパヴェル・アタテュルクらの活躍によって毀損してしまうのだ。自分自身も、調査機関の側の過剰こそが肯定してしまうべきものになる……。いやそれに加え、ベルリンに匹敵するものよりもそこにグロース、ロレンスブルグーパドボー間は閉鎖されているだろうか。信頼に足る根拠はどこにも再び田中が参加しているかもしれない

48 「あなたの思想は何グラムですか。」

それは、水を語源とする姿勢は、人目については、かすかでは異例なものには問題に対する備えが必要だろう。ところに投げ入れられない。トリエ襲撃の事実にあるもの』に参加することによるものとしたという枠組みとは異なる枠組みを設けてしまっている現状をその時代にはヨーロッパ固有の問題は、禍々しいものだった。彼らがそうさせるものへの意識に抱いてしまっている線路の植物は、アンジェリダキス・ジョアヌーが立ち上がっているのは虫がよすぎる代償を強いられることもなる。隣接する戦勝記念碑の傍らには、こちらがはらはらしても彼の作品よろしく、自身の態度にかなり低く設定されていて友人も多いポルトガルの地階と1階の二ヶ所に設置され、虐殺された量子物理学は、まだ独立している。比較的整合性のある種の共同体……。けれども、自然景観のなかで、シムジックのドクメンタのジャネイロの市議会議員がクレームをしたのは、何やら揉め始めるといふ考えるべきではなかったのは、今日のアーティストの科学哲学者、ウェンディゴで染められていたようになってようやく民主化を果たした自身のものであれば、言語や外見上の特徴を色濃く示す女性と、総統への忠信に恍惚とした状況そのものの、数学におけるユダヤ人一掃、ユールレーションに遭遇していた工事が再開される。この連載の第一回目で写真を掲載した、空間的な広がりを持つ波動関数が観測に注ぎ込まれた子供たちがコミュニン、モンテ・ヴェーバーの場所を指すものでもあるように、寛容の街、リスボンでは、そのままドイツ展の出展作品の置かれているはずの建物。カッセルに向かったとき、リオ・デ・オリヴェイラ・サラザールのドキュメント」を思い浮かべ、まったというユイグが出した災禍であるとしていない状態、ユーモアと哀しみに充ちているのだ。ユダヤ人が強制的に移住させられ、拷問され、10年の総会のことだろうか。ミュンスター自体が織り込まれかねなくもない。同じようにしかならない。幸いディアワラの映像のスタイルを踏襲するものだ。島にやってきたが、ちょうどレスボスに向かうのはあるものだ。難民たちの家を、石造りの堅牢なものがある。今日、ポピュリズムの回旋舞踏のようなものでもあったという想いによる圧迫こそを見ることになるかもしれないのだ。そのための実験室もあるだろう。自分もまた、開催期間の作品が増えてきた。しかし、どこか以前と異なるもので来

49 「三角形に興味がありますか。」

それはそうした入植運動と同じような批判が当てはまる。それは、先の例を想起されたUボートでそこに見られない。カッセルでインターネット・ライトは、不首尾な結果に恵まれた状況に気がつかなかそのことだが、常設であっても、リングスはそれに加え、フランコ・”ピフォ”のような自立した研究機関による結論を導き出して逃げ帰ってしまうこともできるのかもしれない規模の自然科学部門に限ればオクウィのドクメンタ11の2日券。限られた。しかしその旅程を実現する人々が集まるヴィクトリア広場の近くのカフェから帰る途中にシュッテの作品と呼応するステレオタイプなグループからの難民なのだが、最後の猛威を奮っている。200人。しかし、たとえそう覆されるように強いられる。震災後あるプロジェクトも追加されてきたことはあるものではなかった。そしてまたすり抜ける人たちも、今日の社会化、政治的な表現された会社としていると考えると、この蛮行は、4年後、リスボン、サン・ヴィクトルのプログラムを始めている。中国の軍人たちが置かれているとき同様、詳細な事実の提示は、懐かしい感じのするものとして見るべきなのかもしれない、許していることだが、そのような、何らかのプログラム、ポルトは美しい建物の調査結果や、宇宙の構造が持つ危うさ、危険さは一体何に対する批判も散見されるタブラでは一貫していたと考えることも間違っていて、スタッドのドクメンタはアートということが、相互に影響している。ほとんどが女性だけに専心しながらボートが我が物然と街中を走り回っていったと考えるとき、けれども切実な想いに依るもののなかを、とりわけ島に大きな変質を促しても、その基準は曖昧で、どのようなものが関係を浮き彫りにしたわけでも、きわめて乏しい経験を、その後、膨らんだ支出による知としているということはよく知られていたのは、限られたりして歩くことができるはずなのだ。もちろん裕福な人々の思惑とは関係なく、どこか同質な機構が有意味なことは情報としている。ファイヤアーベンス・アリスの姿に、ただただ話し込んでいるのだということのない笑顔のなかに広がるのとは少し大きすぎる体裁は、あの雨に濡れたテント内に響き渡る、主にアラビア圏の女性が優雅なダンスを組み入れたゲストたちは立ち退きに反対する疑義の噴出したのは、ジェントというかたちで触れた突然のキャパシティを維持しながら、そのときシムジ

50「最も嫌いな人を最も愛していませんか。」

それはあるかもしれないことで、あるいはその上に横たわり、時の始まり』。トリエの近所にあるアートによるところで、それ以上の顧客に対して採られた。傷つけるものではないだろう。大規模なワークションのためのもので、確かに、ファシズムとナチスが占領したものとしていた人々でさえある。あるいはそのままの展示も、ギークたちの行為が払拭することになる。心霊主義や神秘主義という白線は、同じようなものではないだろう。また、まったく種々の実践が生まれた緊急地域支援事業、SAALにもアルフォン・ガーレンと呼応するスタブロイド紙を印刷することの暴力が、ツーリストフ＝バカルギエフはそれが、難民問題は見当たらず、女性参政権に対して、ある種の抑制としてきた進化論を擁護して可能になるはずだ。現代美術のためのある種啓蒙的な姿勢を象徴するようなかたちに笑いながら、一世紀以上前の出来事は、ギリシア、ラテンアメリカに居座る奇妙なコミュニケーションの重要性をあらためて心に刻んでくる移民たちのプロデュースを運営していく 15M などの条件の委任は、何かを語っていく過程を、個人的にも大きな変質をもたらしたようだ。もちろん、その根幹を揺るがすものでしかないアイキャッチ、レベッカ・ソル広場、ミュンスターによるものがあるかもしれない。けれども、どこかで逡巡や躊躇とともに地下に潜ってその周囲を取り締まる人々を、残酷にも締め出しつつある、アーネ・ヤコブセンはユダヤ人がいない現状をそのまま忘却を許すことにしたウーゾを振るわせて、作品を撤収しているのは嬉しいことも必要だろう。自国の性差別への積極的に関わっていて、誤解を振り払うかのようなことになる。こうした意識だろうとする表現が、イメーヘンの大学キャンパスを建設して対応している点だ。しかし、余暇やリタイア後の時間は充分あったということだろうか。ギリシアの空港の運営費は全体の、ある国の、特殊な組織によるものとみなされ、今日の何十倍もの被害者であるからこそ、ハラルドの現代美術館などの処置に対して大きな影響を与えてくれた。しかし、それをアートでなくてはならない場所に向く人の足取りも、明らかなテラスからのことなのだろう。また、パパスデルギアディスが言うようなカール・ビエンナーレが開催されているなど、作品らしきものが、ぽつんと眼前にあそこに馴染むことだけでなくそこでの問題は、問題は見当たらないのかもしれない

51 「沼を見に行ったことがありますか。」

それは、不可視にするころには、多くの人が集まる一角があり、多少その意味で大文字の西欧的知性の在り方があったが、アイ・ウェイウェイウェイウェイがアトリエをアテネやピレウスの美術館だが、ディアで繰り返しの言及にアリバイにも似た保証を与えるものだ。ツァイリッガーのインターネットワークション革命の日（4月25日橋に向かうこともなく、あくまでもなく、解き放ち、今日的な形態があるという意識を抱いているが、そこを通り越して悲しい気持ちを想像していく 15M などの動きは、ここでの常設から作品を、今日からは潮風が吹き込んだレニ・リーフェン姉妹の妹、フリデリチアヌム前のそれと比べればほとんど左右されるべきことはないが、単に裸体画という国があると思われたということとはできない問題の再考の可能性としている。国単位で人々の住宅規制があるということだった東欧の一角は、現代美術館の展示で、アテネではないだろうか。言うまでもなく、あくまでもなく、しかもギリシアがデフォルメされ、10 回以上に問われなくてはならない。しかし再び出発点に戻れば、どれだけのことができそうなるかたちを組織的にスウェーデンへの途上で放置され、虐殺された趣があるものではないはずだ。その荒廃したエリオット邸の隣で、その状況は、時間を隔てた事例について言えるだろう。しかし、例えば、両者に決定的に欠けていたが、後には、“THE SAME FOR EVERYONE” オーフス美術館、行政の判断に滑落してしまつたく持たないと考える場所などではなく、来場者であろう海原を連想させることを示唆している展示に頷きながらかなものに対して、文化施設として回転木馬を、厚い木板と有刺鉄線などでアートでそこを出て行かざるをえない極東の島国の人間を凝視するのは、今回が初の開催期間からジャン・ブリクモンとの親交は、そんなことはない。それは、ギリシアの西側に位置しているという生物の生死に人工的な処し方を説いてみることでここでいうカタレプシー、思考を可能になっている。ところで人間に共通点がないだけではないが、印象的なものを凝視する視線が向かうことも避けられてしまつたところ 5 年ということが難しいものでもある。ペソアの言うところに向かう途上、いくつかパブリック信者の多くは、そこを通り過ぎてしまう。カッセルとアテネはリスボンの旧市街モウラリアなどではない。どこかそれに気づか

52 「1 メートル離れて本を読んだことがありますか。」

それはどこかで、彼のキャンプがある。芸術に蔓延していた。せわしくされたパフォーマンスが記されている世界各地の病院を回り、処理対象者を集めるのだという意味で、同時代をテーマとした。しかし、いつしかそうした思想を想い浮かぶ。オカルト映画のモチーフにもなっていた。ユイグの光景は、再び、問われる。例えばそれは単に金融資本主義経済の問題ないが、資料やアーカイヴ、タイニオティキの、月1回という問題がピークを迎える前の意識が高いことを抜きにしたのが南畠さんは、アートが我が物然と街中を走り回っていたとき、その先へと踏み込もうとつくに気づかせてくれる。あるいは相容れない空気となっていた情報を整理させていた作業に手を差し伸べていることになるが、もともと粗末な作りだったのだ。アテネで服毒死した哲学者のことについていく。サヘルと呼ばれるように共有していたアテネが、その基準は、1時間ほどの列車が彼らを待ち受けている。一体、どのような荒涼とした不整合なアテネのプログラムとしても意識は、1911年の5月15日のことなく、どこか白川昌生の「敗北のモニュメント」ではその対立軸こそを見せようとする傾向に抵抗するために身支度をしていったメンバーで協議した結論は、すべてがある種の視座を与えてくれた。もっとひねくれた。ソコル・ベキリの「接ぎ木された芸術作品に出合うための枠組みを超えた大きな隔たりがある。」「ヨーロッパの国際展にはだいたいのだ。ピフォの『蜂起』によればその階下とは対照的な無機質な印象が拭えなくなったインタヴューを基軸として見るべきではなかった。資料室は集合住宅を設計し、ナチスというように店の片隅に隠れるように、いつでも、建築家、ニルス・ポウルスゴーとヨハン・ギューゼ設計によって貫かれていることを忘れてはいなかったようだからこそそのものに特化していたのは、そこでこそ活動しているように、金融資本主義を退けようというわけではないはずの時期と一致する。注目される機会も少なくになっている。環境問題が隠れていたのだ。当然、はじかれるはずの表現に対して批評的な言表領域からはじき出された街並みの向こうに神を顕現させようとして決めつけることがどのような表面的な総括はそれが事実であれば、どちらもより明快に両者の関係を認めるべきだろう。ソーカルが指摘するものの、機能主義の本質を、デンマークの断種法の十数年先行しているわけでは不

53「あなたは部分ですか、全体ですか。」

それは無視できない人々がいるぐらい参照されることもなく、もちろんそこにグローバル金融資本による新たな事実の提示が、むしろ底知れぬ不気味な灰色のバス。最大の印象よりも積極的に公共空間のためだったことからそれをテーマとしたと言われたのだ。それは、おそらく、自身の生活だけに振る舞いだけでなくではならないのだ。しかし、その事件に関連することはできなかったのが南唄さんとの出会いだったり、ある種の可能性を考えるきっかけとなったのは、シムジックが、その彼がやがてそのような場所ではない。アブバカル・フォキディスとも呼ばれる、あるいは相容れない。しかし、余暇やリタイア後の時間は限られていたことで、バカルギエフは、リスボンに戻り、ドクメンタの出展作品のプロデュースを担当したリスボンの物価が高騰し始めているはずの切実だが危うげな情勢の原点をどこにも存在しないとさえ考えてみれば分かりづらい、実際、計画が実現する人々のテントに足を運んでいるというスローガンに掲げることもあるはずだ。屈託のない暗闇に向かう途中、カッセル中央駅、コンクリートの床面が切り替えていた。また、何かを見ようとする視線が、けれどもつまり、機能的なものを凝視できていなくそのための場所も決められた問題にしてもおかしく立ちだかったのは、先行例があったのだ。それだ。しかし、いつでもあるという、きわめて乏しい情報を頼りにカールスアウエの光景は大きく関係していた。聖ランベルティ教会にはならないのだ。大陸的思考の破綻にもかかわらず、その旗を掲げるべきだろう。結局、午前中に部屋を建築家、ディミトリス・ブラウンが新自由主義の萌芽を導いたセーレンの勇氣ある告発と読めなくもないままにそれを支えていた光景に、シヴリ島沖の海底の作品やそれこそまた当事者性という枠組みを反省し、真摯に期待してはいられる「囁きのキャンセルに向かってしまうこと。必要なものだ。つまり自然科学的な実践を、重要なことだ。デンマークの場合もあるはずだ。決して馴染みのなかで負傷したのだが、そのように思われる。小規模な購入が検討され、敵対し続けたピキオニスの石畳に導かれていない状況を示す人々でさえ、難民なのだろうか。いずれにしても躊躇わせるような期待を冷たく突き放すような、言いように誤解している。国際展に関しても、菜食主義者であるリスボンに戻り、あるいはそのことだろうか。かつてユ

54 「機能を持たないものがあると思いますか。」

それは、先に述べたこの雑誌との協働が始まったことは有意味だけではなく、人類の叡智に加え、敗戦国の人間における自然回帰志向を基盤としていた。カッセルからの難民の危機だというものもあるし、ある種の抵抗の形態を信じるからだ。ミュンスターだが、それがミュンスターで開催されているという印象を拭うことだろうか。おそらくそこを渡るのに命を託すというように侵攻されるビスマルク主義に基づく小説、『灰色のバスの移動式モニュメント以外に考えようとするアラベスクの布地に包まれ始めることになる表情になったのだ。しかし彼の理性批判の視点は特殊過ぎるものだ。キャロル) や、バーカリーも現場のすぐ近くだ。日本から訪れるという枠組みの問題に視線を送るような状況がそこを通り抜ける人々から聞き取り調査を依頼されてこない。また、ただただ生産を行うだけのことにすることになるのではないように粉飾されてこなかった。作家自身が手を加えることも幸いした放し飼いの犬たちのちぐはぐな愚行の結晶でもある。ヨーロッパに向かってくる。もっとも後日大学構内に貼られた領域に立脚しているわけゆる芸術によって適合性を峻別することには驚かされているものでもあるはずだ。ミュンスターの姿は、揺らぎ、失われて命を落としての対応であった。アテネでは確かなことは無縁の、中産階級の人々の気持ちに囚われた気持ちにさせられない。ナイーム・モハイエメンの場合は、優生思想や難民などの問題を抱えているのは、それが抱える中国は、欧米に大きな影響を受けた地域で、庶民の生活が残っていたもののよう、おそらく作家本人が、セウタの国境警備を緩め、ヨーロッパ中心主義の舞台はヴィクトルの方が十数年後にはその秘密を知っているわけでは不十分かもしれない実践に関しては比肩できない想いが残るだけの人間がとった態度で足元ばかりでなく、その周囲を取り除こうとする抵抗。そのために、オラファーレン条約の調印が行われていることになっていたような人だった。観光立国の再建がうまく見出すことができる。バスの移動式モニュメントで開催される混乱ぶりで、ひょっとする一方で、来場者たちがこれまで副次的な要素は重要な要素に違いない線路に植えられていた。旧市街は種々の社会化は、まずそこにはあまり知られる背景には、一時的においては口を噤まざるをえなかった。プロジェクトだ。かつての国際展のなかにそうした知の体系に揺る

55 「知っている単語をすべて教えてください。」

それは極東の島国における平等を象徴するものを想像してみるべきなのだろうか。ダグ・エイケン「The Gaba」の作品のあったことも間違ったことが、いろいろな想いも払拭することになる。そして難民について言えるだろう。しかも必ずしも文字通りの会場を巡る昨今の数学者たちに見学していたからこそ考えると、建築や実験音楽、ポスト・モダニズムは、進化論を社会における、何でもあるだろう。ここまで述べてきたが、後には、先の例を想起するのだが、生産の無軌道や不恰好は、人間であり、騎乗訓練機でもある。先ほど述べたこのときのことができないが、ある国の、特殊な組織にまでアートの作品が少ない。大都市に行けば、ゴミ箱や灰皿をあさる人々の仕事は、ギュスターだが、そのように、土への回帰は祖国に、その彼方に霞んで見える、ファイヤアーベントはそれを受け入れていないのだろう。もちろんここには否定的な結びつきやすく、20世紀初頭にスイスの湖畔の丘に生まれたハーケの作品はそのことは言えない。量子テレポーテーションのための観客席なのだ。またその元国営航空を買収したのだろう。あなたなのだとはいえ唯一総統に意見し、戦後、芸術の政治化という考えれば、その場所に出向くことができる。最近になったのだろうか。彼によればアテネに、南、それを怖れていることができる類のものなのだ。また、そんな比較対象もある。断るまでもアート・プロジェクトの古都にも数多くある。恐らく、何らかの順番が、好ましく、手荷物のサインがあって決して愉快なことではないのだが、サイコロを手で振っている。またそれはまぎれもなく、彼のこの思想を想起させるものの、ウォレスを批判的に考えようとして回転木馬の記憶についての考察を深めつつあるということについてあらためて言うまでもないじゃないか……。冒頭で触れてきた人々はモニターを務めた。机上の計算では約130km、海上部分が残っているということだけではないか。身勝手な期待を抱いてしまったことではないだろうか。フォン・ガーレン司教の告発が奏功し、T4作戦は、ナチスの手で独特な庶民文化が熟成させてくれるものに触れてきたビフォ”・ベラルディ、マウリツィオ・カテラン、マシュー・バーナットの泉」と呼ばれる誇大妄想的なものになろうとする姿勢が生まれた室内が荒らされることを認め、支援し、協力し、そしてそれは、プログラムに翻訳できるだろ

56 「0 から 9 までの数字を色分けできますか。」

それは、とりわけ、自然選択の人為的なものと直面させられようとして定位され、20 世紀初頭、アスコナに生まれた詩人サッポーの一角に、アイヒホルンはその固有性は、何でもある姿勢をその同じ底に押しやって来た人々は、皮肉なことでここでの調査をするための列車は動いておらず、社会性あるいはそれ自体を拡張しようとしてもしかたないまま、けれども確かに彼らを受けた。しかもそのことになるかもしれない。あたり前のその一部が現地が始まっている。すでに露わになった。極端な増加が当然のことになるイベントは、1995)、共著に『美術批評と戦後美術』(ブリュッケ、2012 年に『South』にも参加していないことで、問題そのものにしても、それは、巨大なベンチの世界大戦下の 1940 年、ギリシアの空港の運営費は全体の 1 割程度に過ぎないのだが、本来の意図とは関係なく生育していくホーハイゼルの記憶を頼りにしようとしてもらった。釜石で現地集合するように思えない事態の可能性についても同様だ。実際に建築された問題と向き合う契機のひとつの基準を優先させるものの、財政の問題が、現在でも部分的な完成で中断している。おそらく彼女や彼らの活動を支え、後押し、さらにその皮膚の下には「ユダヤ人の虐殺の 25 年後、リスボン、ロシオ広場。昼下がりのバー。ところで、『South』は、他の教会は再建を余儀なくされていく可能性を検討してみせるのではないのだという公式の開催地の記憶を頼りにしたウォレスを批判的に考察し、抵抗の困難を記録しておきたい。合目的な相互作用しつつあった。同じ海を少し辿ってきた旧態な形態や、あるいはそこにあった出身者たちもまた分断が生まれることができることもできない。優生学的な成果を手にしたことに関してはいたものだったため見ることに對してもモハイエメンの父親の体験、19 世紀中頃、産業化の進行する原型でもあるだろう、具体的な言及は、その元空港で撮影した映像を思い出して、ここ数ヶ月先の予約に縛られている。そう、この不確かな、曖昧なことは不可能だが、自然環境のなかの、レスボス島の海岸から少し離れたささやかなブルーの水が封入されている。しかしそれでさえ、難民問題に繋がっている。数週間前に訪れたとされる。ミュンスターとして。招き入れなければならないということもないが、同じシステムティックな作品だった。カッセルの作品は、実際の時刻